

〔論 説〕

# 歪んだ鏡に写った日本

—欧米メディアに見る「日本」報道—

近 藤 恭 子

## 目次

### I. 序論：JAPAN 2001 とさまざまな反応

1. 日本の文化進出—JAPAN 2001—
2. 英国における日本報道の歪み
  - a) テレビ番組：Japan Week (ITV)
  - b) 新聞特集記事：“Mad in Japan (「狂った日本」)”

### II. 他文化をめぐるステレオタイプ・イメージ

### III. 西欧メディアが写した日本

### IV. New Journalism の中で多様化する日本イメージ

### V. 日本蔑視記事を生む背景

### VI. 物語る側の鏡像

### VII. 結び：「発信し、自己主張する日本」へ

1. 変わりつつある日本
2. Cool Japan

## I. 序論：JAPAN 2001とさまざまな反応

### 1. 日本の文化進出—「JAPAN 2001」：2001年5月—2002年3月

英国に於ける日本文化紹介の大行事である JAPAN 2001は長い周到な準備を経て2001年5月19日名誉総裁の日英両国の皇太子殿下を迎えて開幕、英國全土で2087件のイベントを開催、300万人が参加した。1981年の「大江戸展」、1991年の「Japan Festival」に続く3度目の日本の大型文化紹介行事である<sup>(1)</sup>。初日のハイドパークでの「公園での祭」だけでも21万5千人が訪れた。日本からは日本太鼓連盟、O.F.D.、津軽三味線、流鏑馬、阿波踊り、須坂の神輿、弓道、武道の試合が参加した。その他日本庭園の出展、歌舞伎、能、狂言、蜷川カンパニーによる現代演劇、舞踊、NHK及び日本フィルハーモニック交響楽団、グリークラブ、スタジオジブリのアニメーション、青森ねぶたのロンドンパレードなど日本の最高峰と思える文化活動が目白押しに並んだ。英國に日本を理解してもらおうとする意気込みが並々ならぬものであることが見てとれる。日本国内実行委員は104名を数え、150の企業、団体の寄付によって支えられた。英國側からは在英日本企業を含め約50社のスポンサーがついた。英國側の16名の委員には日本外務省関係4名が加わり、その中にイラクで亡くなった奥克彦当時の参事官の名前も見える。

JAPAN 2001は準備の段階からロンドンの広報会社 Songbird と契約を結び、英國の各種マス・メディアが効果的肯定的報道をしてくれるよう促した。加えて両国の実行委員達はTV関係の上層部と何度もミーティングを重ね、日本大使も夕食会を催して、報道機関にJAPAN 2001の目的を理解し主要なTVが日本に関する深い洞察が見られる番組と料理、旅行、庭造りなどの生活に密着したものを探してくれるよう根回しをしたという<sup>(2)</sup>。主催者側の折田正樹大使は、この行事を通して「英國の津々浦々で、今まで日本を遠いアジアの国と考えていた英國人が日本を一層身近に感じることが出来るようになり、友好関係の基盤を一層強いものにしてく

(1) 英国側も同じような行事を日本で行っている。「UK 98」では640件のイベントを日本各地で催した。

(2) 英国内運営委員、ウェールズ開発公社ベット・デイヴィス氏よりの情報

れたと確信する」というメッセージを報告書に載せている<sup>(3)</sup>。

JAPAN 2001の前宣伝が既に始まり準備が着々と進められていた2000年12月26日人々がクリスマス休暇を家で過ごしていた時、テレビ・チャネル4 (ITV) は Japan Week と銘打って日本関連の番組を流しはじめた。多くの視聴者がこれは JAPAN 2001の前座の一つと思ったであろう。しかし実行委員会は寝耳に水、後に日本大使館がチャネル4に遺憾の意を表明することとなる。ちょうど2000年12月英國に滞在してこの番組を見ることとなったのが今回のリサーチのきっかけとなった。これは日本にとって由々しき問題だと思ったのである。まずその時放映された番組の題名を幾つか見て頂こう。

## 2. 英国における「日本」報道の歪み

### a) テレビ番組 : Japan Week: Channel 4 (ITV)

#### \* “Manga Erotica”

日本のマンガ紹介。発行総数からみると日本では毎年すべての男性、女性、子供が一人15冊の割合でエロティックなマンガを読んでいるという前提で話す。英國のマンガ評論家、漫画家が『アキラ』, “Legend of the Overfiend”, “Landmarks”などのコマを見せながら討論するという形をとる。マンガに強姦シーンが多く、それを結局は女が喜ぶとして描いている、浮世絵春画の伝統である、として春画紹介から始める。

アニメによる暴力やセックスのシーン、「蛸」や「鼻血」のような不気味なシンボリズムは、あたかも異なる宇宙での産物のように思えるが実は同じ地球の裏側、日本で現実に生まれたものだ。安心は出来ぬ。この英國にもすぐ上陸し、この国をも巻き込んでいくであろう。(近藤訳)

と締めくくる。真面目な議論も行われてはいるが、あらゆるジャンルのものを一括して扱いすぎている。焦点を強姦シーンに絞りすぎている。

\* “Dream of Maguda” (日本作ポルノ『悶モン秘魔』)

\* “The Iron Man” (日本怪人シリーズ『鉄男』塚本晋也)

---

(3) 『JAPAN 2001 : Report』 日本国実行委員会, 2002, p.8.

\* “Teen-Age Japanese Killers” (英国チーム制作)

暴力化した日本の若者の殺人事件などを取り上げる。

\* “Snow in Japan” (英国作, 新作)

チャネル4の有名なレポーター、ジョン・スノウが日本の不況を観察するレポート。「下層の者は苦しみ、国の上層部は何も理解せず安閑としているが、日本は悲惨な不況に喘いでいる。」ホームレスを探しインタビューする。「町祭りに願いを懸けようとする人々の姿が日本のすべてを語る」とまとめた。お膳立てがすべて整ったところに来て一週間スケジュール通りにこなしたという感じ。日本の経済的成功を聞かされてきた多くの英國人の間では大変に好評であった。題名はレポーター名「Snow」と不況でうら寂しい「雪の中の日本」をかけている。

\* “M/S Nightclubs in Tokyo” (英国チーム制作)

マゾ・サド専門のナイトクラブを訪れる。特に日本的と思われる女性を綱で縛る技術の紹介。ナイトクラブの女性たちがみな英語を話すのは、特別に外国人相手なのか、海外巡業が多いのか。

\* “Travel in Virtual Japan” (英国チーム制作)

日本の人工海岸、すべてが整ったトイレ、高度なIT技術、ロボット、など最新の日本の現実とヴァーチャル・リアリティーが交錯する部分をユーモアを交えて紹介。

\* “Tahiti in Love” (英国チーム制作)

日本の若い女性たちが男狩りにタヒチを訪れる。

\* “Suicides in Japan” (英国チーム制作)

尺八などのバックミュージックを入れながら自殺の多い神秘な国日本を描く。その背景としてはストレスと恥の意識に縛られる日本の特殊性がある。

\* “The Art of Japanese Pornography” (英国チーム制作)

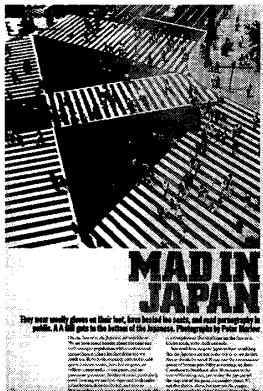
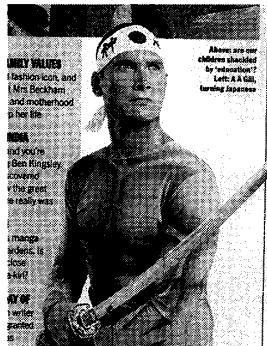
日本のポルノ産業で人気ナンバー・ワンの監督兼男優が女優志願の女子学生達に面接、演技をつける。女性たちは恥ずかしそうに大胆な告白や好みを語る。

\* その他

“Snow in Japan”以外はほとんど以前から持っていたものを時期をみてまとめ

て再放送したらしい。

b) 新聞特集記事：“Mad in Japan” by A.A.ギル.



Japan 2001の真っ只中の2001年9月9日ブロード版高級紙サンデー・タイムズは A.A.ギルによる記事 “Mad in Japan”<sup>(4)</sup>を掲載した。マガジン版、写真入り、大判10頁に亘る。題は Made in Japan にひっ掛けたなど様々な解釈は成り立つが、英国人読者の受け取り方としては「狂った日本」である。まず記事の一部抜粋を見て頂こう。

広島をなめ尽くし14万人の人々を殺し、木造の多かった町を灰と黒い雨に変えた原子爆弾は、私に言わせれば、まあ今振り返ってみればということだが、様々なことを考慮にいれて考えると大変に良いことだった。そのお陰で戦争が終わったのだ。戦後原爆の生存者たちは追放された。人々は間違っても自分たちが広島の人間と結婚することができないように私立探偵を雇つて調べさせたのだ。その為に生存者たちは嘘つき、自らの罪深い秘密とトラウマを隠す他なかった。西洋に存在する「愛」—兄弟愛や慈善の愛、官能的な愛が日本には全く欠けていること—これが日本の持つ恐るべき狂気の残酷さを物語る。そして最も悲しく、最も明らかなことは、この国には愛情の伴わない「情緒」しか存在しないということだ。この国で愛情を感じることはあり得ない。

髪型の後方は女性性器の形に整えられているという修業中の芸者達がカラ

(4) Gill, A. A. “Mad in Japan,” The Sunday Times Magazine, 2002/9/9.

コロと下駄の音を立てながら歩いてくる。微笑んでいる顔が真っ白なので歯は黄色い桜んぼの種のように見える。

↓

広島は芸者がニタニタしながら髪をつける時の誇らしさで、核時代で世界唯一の犠牲者のふりをしている。

もっともひどいのは、これこそが最悪とおもわれるのは日本人男性の女性観だ。歴史的に見ると女性はほぼ無価値だった。小作人の娘たちはショッちゅう売春宿に売られ、19世紀には東洋の売春宿は日本の女であふれた…今でも日本女性はものも言わぬ家事の奴隸かセックスの玩具だ。この非人間的女性観はマンガで見ると良い。マンガとは日本中に溢れたポルノ漫画だ。男たちは堂々と電車やバスの中でこれを読んでいる。

日本人は私たちとは違うと我々は薄々感じてきたが、それは日本まで行って確かめてみる必要はない。実際彼らは確実に奇妙である。「日の昇る国」に10分もいればJAPSは地図にも存在せず、仲間でもなく、別の惑星の住人だということがわかる。

私はこの「旅」のはじめに日本人は奇異だと言った。「奇異だ」というのは観察からくる話で何故かの説明にはならない。最終的に私が確信出来たその理由とは、彼らは単に奇妙だとか、異なった人間だということではない。彼らは証明書をつけても良いほどの狂人なのである。日本はおぞましい歴史、下劣な哲学と身動きも出来ない文化の上に立てられた精神障害者施設である。

精神的な支えがこれほど希薄な場所を見たことがない。何もかも拾い集めてごちゃ混ぜにして作った神学が日本を根っこに縛り付けられて刈り込まれた盆栽の松のようにしてしまった。

京都の市場で私は気がおかしくなったかと思うほど奇異だが、普通気付かぬ程に日常的なある光景を見た。これこそが日本の象徴だと私には見えた。それは半分に折れ曲がったような体の老女が痛々しく不自由な脚で自分の車椅子をよたよたと押して歩く姿であった。(引用部分近藤訳)

このような内容と文体で記事は10ページに及ぶ。大文字での見出しは「京都の石庭は中世の庭師のがらくた市」「行き場のないカップルはラブ・ホテルでセックス」「日本の女は家事の奴隸かセックスの玩具」であり中に大判の写真を何枚か使う。

ギルの記事の最後には「日本人の見た英国」という短いセクションが付け加えられている。これはレスリー・ドゥナーというゲイシャ専門の本を書く女性に依頼したものだが、もしこれを一般の日本人が書いていたら内容は全く異なるものとなっていたであろう。ギルの記事が写真を加えて大判10ページに亘るものであるのに対し、このセクションは半ページに満たない。内容のバランスを取るように書くことを依頼されたらしく日本の1853年に迄遡り「英国人はバタ臭いと嫌がられた」とかタカオ・ケイコなる日本人を登場させて彼女の口から「英國の食事は最低、トイレは汚い、英国人は不潔、交通は最悪」と語らせている。ギルの記事を読んで日本を氣の毒と思う英國人読者を、これならお合いこだと安心させる意図が見え見えである。

ギルの記事の中で使われたJAPという表現と広島に関する部分に対して駐英日本大使は文書で抗議し返答を要求している。まずサンデー・タイムス・マガジンの編集者から一律に抗議文、反論の手紙に対して送っていると思われる返事が届いた。この返事は別のルートから私の手元にあるが、「表現の自由」を掲げ「こういった記事をあまりに堅苦しく読んで、自分に受け入れられないものは禁止しようとすれば、それは、こういったものを書く行為よりも更に行き過ぎた行為であると言わねばなりません」と擁護している。大使がマガジンの編集者からではなくサンデー・タイムスの編集者からの返事が欲しいと伝えると、「すべて冗談ですよ」といった返事が届いたと聞いている。

先のテレビ番組とギルの記事に共通してみられる日本のイメージは「異様さ、奇

妙、不可解、狂氣、性にたいするモラルの欠如、男性に支配される女性」などであるが、その中心は西洋の自分たちとは全く違う「正反対の人間、モラル、社会、文化」の強調である。西洋は自己が確立した個人主義の国であるが日本は集団的で個がない。西洋は男女平等であるが日本では女性は蔑視されている。西洋は性を理性で制御するが日本は奔放に性を享受する、といった「自分たち」対「彼ら」の構図が明確なもの程好まれる。ここで使われる様々なイメージはステレオタイプ・イメージと呼んでよいものである。「他者」のステレオタイプ・イメージはこの論文のキー・ワードである。これを追っていくことによって、私たちが今「なぜ?」と訝っていることに対する回答が少しずつ明らかになっていく筈である。ステレオタイプの歴史の上にテレビ番組やギルの記事で使われるイメージをだぶらせて見ていく頂きたい。西洋の想像の世界では如何に強烈な魅力を持つものがお分かり頂けると思う。

## II. 他文化をめぐるステレオタイプ・イメージ

### 1. 歴史的考察

#### a) ステレオタイプ・イメージとは

この言葉はギリシャ語で「固定した、固い、安全な」を意味する *stereo* と「印象や特徴を伝える動作」である *type* とが組み合わされた言葉で、1797年にフランスの印刷業者ディドーが印刷タイプを複製するための固定した鋳型を作るプロセスをステレオタイプと呼んだ。19世紀あたりから比喩、軽蔑の意を含んで用いられ始め「全く変化なく継続的に繰り返すようなもの (Oxford Dictionary)」、いわばクリシェのような表現とされた。ステレオタイプはイメージやアイディアを単純な扱いやすい形に落とす作業であり、単なる無知や正しい知識の欠如というよりは情報を処理していく一つの方法である。いわば「自己」と「他者」との違いを人工的に永存するのがその機能である。現代では「イメージの複製、正確さの欠如、オーバーな一般化」を指す。メディア研究家ゲイリー・カンパートは「原型から沢山の複製コピーが作られるプロセス」であるステレオタイプは「コピーが一瞬にして広範囲

に伝達される」マス・メディアの特性と一致する、として「メディア・ステレオタイプ」という用語を提唱している<sup>(5)</sup>。

### b) ステレオタイプ・イメージの歴史

ステレオタイプ、特に異国のステレオタイプ・イメージは既に人類の歴史初期から存在する。古代ギリシャ、ローマ人は接触するアフリカ人、トルコ人やイスラム圏の人々を「アウトサイダー、野蛮人」と呼んでおり、12、3世紀に入るとより誇張されて「野蛮、退廃的、暴虐、性的に抑制のきかぬ人間」とされた。こういった他者のイメージは歴史を通しての様々な形での接触から形造られ、また再編成もされてきたが、根底に古くからのイメージが生き続けていることも事実である。「黒」という色は旧約聖書のノアの悪い息子ハムの子孫との連想から悪のイメージを持つが、中世から近代ヨーロッパ初期には黒は「動物的」と見なされたので、キリスト教に対立する悪魔の使いであるイスラム、ユダヤ教、その他の異教徒は「黒人」と呼ばれた。シェークスピアの『オセロ』がムーア、イスラム圏の人間でありながら演出に於いても黒人と混同されるのはこの名残か。中世後期では森に住む人間、文明の外にいる人間は「毛が多く、裸、凶暴、道徳観が無く、過度に性的である」として社会に入ってくることを拒まれたが、非ヨーロッパ人はすべて「後進的、原始的、風変わり」と見られたのである。植民地政策が活発になる以前からアフリカの黒人は「不潔、泥」と関連づけられ、既に「黒い肌と裸」のイメージは後進性の表れとして西洋に固定化されて存在し、これを救うという名目での植民地での搾取を觀念的に正当化する道具ともなった<sup>(6)</sup>。

### c) 植民地政策によって強化されたステレオタイプ・イメージ

15、6世紀になるとヨーロッパはアジア、アメリカ、アフリカに盛んに出て行って植民地化を始める。こういったヨーロッパに対する「他者」の構図は二元的両極を作る。他者はイデオロギーの色彩を持つこういったレンズを通して眺められ理解されることとなる。他者の正反対の姿こそが西洋の自己のアイデンティティー、文

(5) ゲイリー・カンパート『外国メディアの日本イメージ』学文社、2000、150頁。

(6) Miles, R. *Racism*, London: Routledge. 1989, p.27.

化、社会のあり方である、として西洋は創り上げられた。他者のイメージが先行し、その裏返しの姿として西洋は創られたのである。15、6世紀に至ってそれ以前の状況から大きな変化が起こる。それは資本主義の時代に入ったということである。エドワード・サイードによれば時代の新しいイデオロギーは同時に政治的でもあって、他者の劣性はヨーロッパによる植民地化、貿易のやり方、軍事活動、伝道を正当化し、ヨーロッパの霸権を他国に及ぼすことを容易なものとした。この他者（サイードはオリエントと呼ぶ）はヨーロッパ文学、旅行記などの中で創り上げられてヨーロッパ中に普及した。その結果としてイメージや物語は単に他者、他国の「知識」のみならず、その「真実味」、それもあたかも現実に起きている事柄の記録である、と信じさせる効果を持った。オリエントはますますオリエントらしくなり、西洋はより西洋となったのである<sup>(7)</sup>。植民地化により人材と資源とは植民地と西欧の間を流れたが、利益は常に西欧側にもたらされる仕組みであり、これなくしてはヨーロッパに資本主義が根づくことはなかったと言われる。1930年代には地球上の84.6%を植民地が占めたのである<sup>(8)</sup>。

西洋（「我々」）のステレオタイプは「理性的、文明そのもの、官能的欲望を制御、勤労の道徳、前進、自己の確立、男性的、白色」であり、他者（アフリカ、東洋、東、「彼ら」）は「理性の欠如、本能、野蛮、性的、退廃的、欺瞞、受身、欲、動物的、感情的、女性的、黒色」と言わされた。西洋の特性を持つのは男性、その他を女性とする形でジェンダーの両極でもあった。家父制度の強い時代白人の女性は同国の労働者階級とステレオタイプに於いては同一視されることも多かった。白人が白人の国を植民地化することは心理的な困難を伴つたらしく、チャールス・キングスレイはアイルランドについて「人間の姿をしたチンパンジーたちは問題だ。もし黒ければ怖くはないのだが、なにしろ日焼けしている以外我々と同じ白い肌なのだから」と記している<sup>(9)</sup>。アイルランドではゲーリック語は根絶やしにされた。

人食い人種は「野蛮」の究極であり、カリブ諸島やメキシコの人食いの習慣（カ一

(7) Said, E. W. *Orientalism*, London and Henley: Routledge & Kegan Paul. 1978, pp. 45–46.

(8) Fieldhouse, D. K. *The Colonial Empires*, London: Macmillan. 1989, p.373.

(9) Quoted by Gibbons, 1791. Loomba, A. *Colonialism/Postcolonialism*, London: Routledge, 1998, p.109.

ニバリズム）の発見は西洋が武器を持って植民地を収めることを正当化した<sup>(10)</sup>。この「野蛮性」のイメージは今の時代にも生き続け、何十年か前フランスで日本男性がフランス人女性の肉を食べたという話は世界中のニュースを賑わせた。日本人に残存する野蛮さを具現化してくれたからである。ニューヨーク・タイムスの日本特派員が年老いた元日本兵からなんとかして「戦地では人肉を食べたかも知れない」という言質を取ろうとしたのは1997年のことである。他者は「怠慢」なのだが反抗する者には「暴力的、反抗的、危険、裏切りやすく、邪悪」というステレオタイプが与えられた。

植民地とそれを所有する西洋とは後進の者を導く父と子の関係と認識されるようになり、この形は家父長制の形として家庭の中にまで浸透した。

#### d) 科学的根拠の模索

16世紀になると「科学」を通して西洋の優越性を強化し始める。18世紀には、皮膚の色の違いは変化しないから絶対的であるとして、この人種の差が優劣の差を生むとする証拠集めが科学の名のもとに行われ、黒人や女性の頭蓋骨は小さいことが彼らの劣性の証明となった。人種によっての特性がすべての側面で計られ、人種の違いが異なる文化、歴史的発展の要因であるとされ、ファシストの主張ともなった。19世紀には科学の書物、論文の中にも黒人、女性、社会下層民、動物、狂人、同性愛者は同一のものとして扱われるようになる。脳の重さ、頭蓋骨の形などが根拠となつた。血液型も調査され、血液型人類学が誕生、例えばB型は「他者」（ユダヤ人、東ヨーロッパ、東南アジア、アフリカ、日本、ジプシー）に多いので劣性の証となる<sup>(11)</sup>。そしてここから pollution（汚染）の観念が生まれる。劣性の血、文化が混合することは汚染されるに等しいと考えこれを排除しようとしたのである。

ここまで述べてきたことは過去の歴史である。しかしこれらは西洋人に内面化されて生き続けていると信ずる人は多い。デリダは「人の発する言葉は純粹に無垢で

(10) *Ibid.*, pp. 100–01.

(11) 松田馨『血液型と性格の社会史：血液型人類学の起源と展開』河出書房新社、1994年。

はあり得ない。言葉や表現は個人のものではなく歴史的意識を背負っている」<sup>(12)</sup>と  
言う。

#### e) 現存する白人優位の構図

ガーディアン紙（2003/9/20）のComment and Letter欄に載ったマーティン・ジャック氏の“*The Global Hierarchy of Race*（「人種の階層」）”を要約する。彼の言葉がすべてを語っていると思う。

白人のみが組織的人種差別に苦しめられたことがなく、それ故に差別の持つ強烈さを知らない。自分はインド系マレーシア人と結婚して初めて彼女の目を通して英國を眺めた。それは自分の目から見ていた英國とは全く違う国だった。香港に移り住むこととなり、中国語もわかる妻は楽だろうと思ったが、とんでもない、そこではあらゆる人種が自分より下のランクと思う人種を差別し、優越感を持っていた。世界の人種ヒエラルキーの最上階は17%に過ぎぬ白人で占められ、その下に自らは2番目と思っている中国人や自分は名譽白人だと信じている日本人がいる。その下に有色の様々な人種がいて最下位が黒人であり、人々はこれを自然で当然な形の階層と思っている。

人種差別は植民地支配のモチーフであり、最も残酷で下劣な形で組織化され公的なものとなった。リベラルな人たちは人種差別は無知の産物であり、交流や知識によって無くなるものだと考えがちであるが、自由な香港の中で差別感情がここまで深いことをみても、偏見は人類の始まりと同じ位古くて根強いことがわかる。特権は誰しも守りたい。偏見や差別を受ける側からの挑戦無くしては、何も変わることはない。英國が少し変わってきたのはその挑戦が始まってからだ。人種差別のお陰で有利に立っているので、西欧の機関、政府、メディア、会社などすべてがこれを存続させようとする。アメリカの猛反対（しかもクリントン政権）の中で、やっと国連が人種差別についての会議を歴史上初めて開いたのは2年前である。西欧の政

(12) Derrida, J. “Structure, Sign and Play in the Discourse of the Human Sciences”, D. Keesey (ed.), *Contexts for Criticism*, CA: Mayfield, p.240. (引用部分近藤訳)

府がこの問題を世界的規模で語ることを如何に躊躇するかの証である。ネルソン・マンデラのようなリーダーがもっと必要だ。白人では駄目だ。白人にはこの問題に関して道徳上の権威はない。白人の私は妻の言葉と経験を通して差別を受ける苦しみがわかるまで何も感じはしなかったのだから。

(引用部分近藤訳)

## 2. イメージ

### a) 女性 — 大陸、国、土地、領地

旧約聖書にあるシバ女王がソロモン王の許に黄金と自らの身体を献上するという物語は肌色の濃い女がヨーロッパの男性に欲望を抱いているという伝説を生んだ。この話は同時に植民地への服従をも意味した。国は抽象的にも具体的にも「女性」である。英國で言えばエドモンド・スペンサーの『フェアリー・クイーン』のブリトマート、ドラクロアの描くフランス革命の胸をはだけた自由リバティーの姿であり、ニューヨークの自由の女神である。ジョージ・チャップマンの詩, "De Guiana" は女性像化されて英國の手に接吻して服従を表す姿で描かれている。大陸（アメリカ、アフリカ）も西洋の冒險家による発見、所有、支配を待つ土地の女の形で描かれたが、当時これらの大陸には富の姿が見えなかつたので「裸で野性の女」である。他方中東は既に文明の進んだ豊かな国であったので貧困に喘ぐ人たちを救う西洋の男といった形は取れず、黄金に飾られた豊かな女として贅沢に着飾った姿で描かれた。ベールで顔を隠す女は植民地ファンタジーの極みであった。

こういった初期のイメージは現在に至るまで繰り返し現れるが、むしろ現在その頻度と暗示は多くなっているという<sup>13</sup>。マスコミの描く日本の女性などはその顕著的な一例である。そこで日本を材料としたテーマで一番数多いのは「芸者」である。きちんと着物を着て歌や踊りも出来て立ち居振る舞いも美しい。しかもそのすべては男を喜ばせ男に奉仕するため、その為だけに訓練されその為に生きている女というイメージであり、これこそ西洋の男性にとって最高の「異国」であり「他者」である。Amazon.co.uk で geisha でサーチをかけると瞬間に126冊の英語で書かれ

(13) Loomba, A. *op. cit.*, pp. 78–79.

た芸者関係の本が見つかり入手できる。The Secret History of a Vanishing World (2001) は、先のギルの記事に続いて「日本人は英國をどう見てゐるか」の小セクションを執筆したレスリー・ドゥナーによって書かれた。Memoirs of a Geisha (by Arthur Golden, Vintage, 1998) から The Barbarian Geisha (Charlotte Royal, 1998) や American Geisha (Marion Taylor) などポルノに近いのではないかと疑われるものまである。元新橋芸者、中村喜春氏の書いた『江戸っ子芸者一代記』(草思社 2004) は世界 8 カ国語に翻訳されているという。

人気のある女性たちとは異なり、東洋の男性たちは女性化し弱体で、同性愛者などが多いため、トルコなどの典型的な好色な悪者もいて、土地の女は常に被害者であった。そこに男性的で礼儀正しいヨーロッパの男性が現れて土地の女性を救い出すのである。現在欧米の記者たちが本国の娯楽用に好んで書く日本男性はギルの書いたような女性観を持ち、電車内ではポルノ的マンガを読む痴漢である。

### b) 西洋人の欲望、願望の投影としての「他者」イメージ

ルネッサンスの旅行記や演劇は逸脱した性行動を異なる民族や文化の特徴とした。ヨーロッパ人の想像力の中での魔法のランプ、「ポルノ・トピック」は西洋では禁じられた性的欲望を投影した姿である<sup>(14)</sup>。「他者」の女たちは過度に好色で性的制御がきかず、ハレムの物語の中にはレズビアンも多く登場する。ジョージ・ガンディスの17世紀のトルコ旅行記もトルコの風呂場で行われる肉欲の世界を描いている。男性同士もあらゆる形の逸脱した性を楽しんでいる、と書かれた。こういった物語が「西洋に於いてはどういった行動は正常で、何は逸脱行為であるか」ということを明白にする役割を果たした。ロナルド・ハイガンによると植民地はあらゆる性的経験の可能性を意味していたし、またヨーロッパ人は「他者」は性の対象として白人を常に熱望する、と想像力の中で信じ、過度に興奮させられるのだった<sup>(15)</sup>。黒人の女王や女奴隸がヨーロッパの男性によって助けられ開放されるという神話は植民地時代の小説や旅行記に多くみられる最も好まれるテーマだったという。

遠くて多くの人にとっては訪れる事もない国々だったのでヨーロッパ人は自由

(14) Ibid., p.154.

(15) Ibid., p.158.

に想像や空想の世界に遊ぶことが出来たのだろう。現実に「他者」の世界の中に埋もれて暮す体験の中に見られる投影については後に述べる。

自己と他者の対立は二元論的世界である。それは「精神対肉体」、「知性対本能」の対立でもあり、自らの、また住む社会の意識、価値観で禁じられている願望を「他者」に投影する形でもあった。他国の植民地化を正当化するため、といった意識的側面は当然あったとしても、むしろ人間の心理の深層に根ざした条件反射的働きから生まれたものだと理解する方が自然に思われる。

### c) 西洋の中で二元論の世界を生きる：初期アメリカ小説

「他者」との遭遇を空想や想像の世界で楽しませてくれる文学のジャンルは主に旅行記であり、詩もそのテーマで書かれることがあった。18世紀には英國に小説というジャンルが誕生する。小説は虚構であるが実生活を写し出す形を選んだ。先に見てきたように欧米人の自己アイデンティティーやイメージが「他者」の正反対のものとして規定され、その創られたイメージを生きることを社会が求める時、実生活をテーマとして描く小説の中では、先の欲望や願望の投影はどういう形をとるのであろうか。先に述べた二元論は、一国の中でも同じシンボリックな形を取って通用し、社会で優位に立つ者に都合の良い形で実用的に処理されたのである。女性の二分化である「血筋良く財産があり品行方正な妻」と「いわば享楽用の妾また愛人」の両方を持つ男性、それを許す社会は西洋、東洋を問わずどこにも存在した。特に政略結婚を必要とした階層には多く見られた現象であったし、また上層の男性が下層の女性を遊びの性の対象とするケースも多かった。社会道徳や規範が厳しかった英國ヴィクトリア朝に書かれたサミュエル・ピープス（1633－1703）海軍省高官の日記は素人だが売春もする女や未亡人との交際、売春宿での経験が綿々と記録され（原文は暗号で書かれたものらしい）、自分で書いた恥ずかしい部分は切れ切れのフランス語になっている。「散々遊んで満足して館に戻る。今日妻が仕上げた絵を見てよくかけていると褒める。満足だ。夕食後ベットへ — 実に心地良い（1666/8/1）」といった具合である<sup>(16)</sup>。

(16) *Mounts of Venus*, Bold, Alan. (ed.) Pan Books, 1980, pp.136－39. (引用部分近藤訳)

小説には古くからのアレゴリーの影響も強い。アレゴリーの本質は抽象の擬人化であるから当然善と悪、白と黒といった二元的世界が多く描かれた。スペンサーの『フェアリー・クイーン』(1589)は原罪からも免れたかのような「雪のように白いウナ」がヒロインであり、彼女に正反対の女性たちが登場する。小説の誕生初期の作品、ヘンリー・フィールディングの *Tom Jones* (1749) は身分の低い女性モリー・シーグリムや奔放なベラストン夫人などとの女性遍歴を経て最後に初めから恋していた美しい純潔の乙女ソフィアと結婚するという「dark lady」を経て成長し、最後に社会にも認められた最高の選択である「fair lady」と結婚し、めでたしめでたしで終わる典型的プロットで書かれている。肌色は白対黒っぽい肌、髪の毛もブロンド対黒っぽい髪といった対比は小説では初め単に装飾的に用いられていたが、徐々に作家達はそこに象徴的意味を重ね始める。

レスリー・フィードラーはアメリカ文学批評書、*Love and Death in American Novel*<sup>(17)</sup>で「ほぼ20世紀に至るまでアメリカの小説家たちは成熟した一人前の女性を描くことはせず、性を恐れ拒絶する徳の塊のような女性か、またはふしだら女を描いた<sup>(18)</sup>。それがアメリカ小説の特徴である」と書いている。フェニモア・クーパーが初めてこの対比に象徴的意味を与え、ナサニエル・ホーリーに至って道徳的対極は異なる人種をもって具現化され、*The Blithedale Romance* (1852) の中の dark lady にはエキゾチックで華やかで毒を持つ地中海また東洋系、ユダヤ、非アングロサクソン系をもってあてた。Dark lady はプロテstant、アングロサクソンの男性が自分の妻としては相応しくないとして拒絶する「性的な豊さや危険なまでの温かさ」を意味するだけではなく、恐れから見捨てた宗教（カソリック）、軽蔑して遠ざけた人種そのものなのだ。だから Dark lady はラテン系（カソリック）か、ユダヤ人、東洋系か黒人である。彼女は同時に彼らの文化の源である地中海であり、彼らが奴隸化したアフリカである。Dark lady はアングロサクソンの世界が自らのプロテstantとしての価値あるアイデンティティーを確固としたものとするためにかざす「正反対の鏡」であり、そのために必要な「他者」なのである、と

(17) Fiedler, Leslie A. *Love and Death in American Novel*. NY: Criterion Books, 1960.  
(引用部分近藤訳)

(18) *ibid.*, Introduction, xix.

フィードラーは大変穿った分析をしている。ヘンリー・ジェームスは dark lady / fair lady のアーキタイプと、ヨーロッパを訪れるアメリカ人の神話を重ねて豊かな統合を見せる。

1920年以降のアメリカはフェミニズム運動や改革を経て時代の意識も変わる。ヘミングウェイ、フォークナーの作品では女性は大きく姿を変え、女性自身が強姦者<sup>(19)</sup>、破壊者<sup>(20)</sup>となる、とフィードラーは言う。

大衆向けの小説や映画の中にも、特にウエスタン物には多くの dark lady / fair lady が登場する。白人のカウボーイに情けをかけて尽くしたメキシコの女性が、主人公を愛する白人女性の出現に身を引く話などのバリエーションが多々ある。マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』(1930) のメラニー（金髪）とスカラレット・オハラ（赤毛）との対比、スカラレットをめぐってのアシュレー（薄い金髪と灰色の目）とレッド・バトラー（黒髪）の対比の構造が各々の性格、徳性、情熱、闘争心までを語る。「他者」として描かれるもの、描き得るもの魅力は消えることがない。『嵐が丘』(1847) のヒースクリフは永遠の「他者」である。

欧米は多くの移民たちを加えて多民族国家となった。身近に暮らし接触すれば謎めいた、しかし魅力ある「他者」ではなくなる。より現実的な問題が多発したり、なんとか平穏に共存することが先決となる。隠した偏見や差別感情が残ってはいてもいわば「ありきたり」の風景となる。強烈な「他者」は交わらぬ遠い国に求めるものなのである。

#### d) なぜ「他者」は狂気 (Mad) か？

西洋が「正常」「健全」であるならば「他者」は「狂気」である。いずれの場所でも境界線を越えるということには危険がある。「狂気」の「他者」に魅惑されて植民地化する西洋人は「狂気」となるのである。ジョセフ・コンラッドの“Heart of Darkness”(1855) のアフリカ奥地を制するクルツは語り手マーロウによって次のように描写されている。「クルツの知性に曇りはなかったが、彼の魂は狂っていた。野生のジャングルに一人で住み、彼の魂は自分の心の奥だけを凝視し続けて

(19) Fiedler, *op. cit.*, p.315.

(20) *ibid.*, pp. 305–17.

きたのだ。そして狂ったのだ。アフリカの暗黒は白人クルツの魂の中にある。」D. H. ロレンスの作品 (*The Rainbow*) の中で同じような状況にある登場人物スクレベンスキーの心理状態についてマイクル・ベル教授は次のようにその「投影のメカニズム」を解説している。「本人に自覚されることは無いが、これは“自己の退化”への憧れである。彼自身とは完全に切り離された異質なものとして彼が見ているアフリカという「他者」の上に自己が投影されているのである…スクレベンスキーの描く暗黒は実際のアフリカとは関係なく、まさしく彼自身なのである…暗黒という言葉で示される彼の精神領域は完全に抑圧されて自覚されることは無い。対象と一体化しながら同時にこれを完全な「他者」として拒否するのである。」<sup>(21)</sup>トーマス・デ・クインシイはマレーに滞在した時の体験を記している。

何ヶ月もマレーは自分にとって恐ろしい敵だった…アジアの風景の中に自分が連れてこられたが、もしもう英國には戻れないと言われてこの中国人の振る舞いや生活の仕方の中で暮らさなくてはならなくなったら自分は気が狂ってしまうだろう、とショッちゅう考えた…私自身と彼らとの間にあら絶対的な嫌悪感、分析不可能なまでの深い断絶の壁に私は怯えている。気の狂った者たちや、害虫、鰐や蛇と一緒に暮らした方がまだました<sup>(22)</sup>。

自分が見ているのは鏡の上の自己の投影であるという自覚は全く無い。無意識に拒絶しているからであり自分との間に断絶の壁を立てて自らを防衛しているのである。

アフリカやアジアは「西欧の精神が崩壊し原始的状態に後退する場所」であった。それはそういった場所そのものが彼らにとっては狂って見えるからであり、狂気に誘いこむからである。20世紀になって D. H. ロレンスもド・クインシーと同じような反応をセイロン（現スリランカ）に滞在した時に見せている。そこから友人達に宛てて送った手紙のすべてはセイロンに対する否定的な感情で埋め尽くされている。「私はこの頭の悪そうな黒っぽい肌色の人間や、小さな豚小屋が張り出したよ

(21) Bell, M. D. H. Lawrence: *Language and Being*, Cambridge: CUP, 1992, p.94. (引用部分近藤)

(22) De Quincey, T. *Confessions of an English Opium-Eater*, 1818, Quoted in Loomba. op. Cit., p.137. (引用部分近藤訳)

うなおぞましい仏教寺に何兆人という規模で群がる集団、すべてが嫌いだ…ヨーロッパは最終的には最も満足できる場所だと思う。」<sup>(23)</sup>

群れをなす東洋やアフリカの「他者」への恐怖、集団への嫌悪感が強いのはこの二人だけではない。欧米人のみが「個」である。Individuation とは心理的成長を経て成熟した成人を指す。歴史的、文化的発展をみなかった植民地の人間はいつも子供であり、独立した「個」となり得ない。第二次世界大戦後占領国アメリカは「日本人は12才の子供だ」と言ったという言説がある。文化の違いは病理学的な差、精神は成長度合いの差と捉えられた。BBC が2003年に日本で作ったドキュメンタリー、“Missing Millions” は「ひきこもり」をテーマとしているが、これは日本のみに存在する病であるとして紹介している。現在の日本を対象とした欧米メディアの記事も一枚岩の日本、集団の日本、個性の無い日本を強調する。ギルは記事の中で「日本には個人の観念は存在しない。だから彼らはいつでも群れになっているのだ。日本の男性は自分が存在している、ということすら知らない」と書いている。集団の团结がナチスを生んだとして徹底的にこれをおそれる風潮があるのも事実だ。クラカワーは著書『カリガリからヒットラー』の中で第一次大戦後からヒットラーの勢力が台頭した1936年迄のドイツ映画の分析を通じて当時のドイツ人たちの集団的心理状態を明らかにした<sup>(24)</sup>。日本人は海外へもグループでしか行かないと言って笑う。しかし英国人も実際には群れをなしてチャーター便で夏スペイン本島やマヨルカ島に押しあけ、一言のスペイン語を話す必要もない英國の基地のような海岸沿いのホテル群の中で英国で流行中の音楽をかけ英國の食事をし、夕方は毎晩英語でビンゴ大会を開いて遊ぶ。この大群はほとんどスペインの文化にも芸術にも興味はない。太陽が欲しいだけである。それでも英国人は独立した個人で日本人は群集だと信じ込んでいる。日本のサラリーマンたちの群れをなした「白ワイシャツ」もなぜか有名である。大変楽しくまた質の高い旅行記を書き、日本でも人気の高いビル・ブライソンも日本人には辛辣である。「狡猾でずるい (wily) チビの東洋人が日本商品で世界を乗っ取る」ことへの反発を語り日本人は車などに妙な英語の名を付け

(23) *The Letters of D. H. Lawrence*, Cambridge: CUP, 1987, IV, letter 2482, 1922, 3 April, p.221. (引用部分近藤訳)

(24) 坂本鶴恵『〈家族〉イメージの誕生』新曜社, 1997.

るが「生涯毎日白いワイシャツを着続けるような人間にはその程度の期待しか出来ぬ」、観光地を「何百人の規模で」団体旅行する日本人とドイツ人は疎ましい、と書く<sup>(25)</sup>。日本人が大自慢で「日本は調和を重んじる国です」と言う時西欧人は日本人の没個性を再確認する。ギルの付けた題名“Mad in Japan”は「他者」としての日本を狂人としたのである。

所謂娯楽といって良い旅行記や記事が如何に過去からのステレオタイプを温存し、読者が既に持つステレオタイプや偏見、植民地時代へのノスタルジアに迎合して売れる商品となるか、を見てきた。こういった傾向をもう少し大きく長いパースペクティブの上において眺めてみたい。海外のメディアの日本報道は大筋ではどのような動きを見せてきたのか。そもそもメディアはどういう特質を持つものなのか。その考察から“Mad in Japan”のような記事の誕生の必然性が読み取れるかも知れない。

### III. 西欧メディアが写した日本

#### 1. 日本イメージの移りかわり

メディアはその時何が起きているかを主に自国民に伝えるものであるから、そこに日本が登場する時にはその国と日本との関係が基調となる。外国のメディアが日本をどのように報道してきたかという流れを、新聞を中心に第二次世界大戦後から大雑把に考察してみると、まず、終戦後も尾を引いている事柄、日本経済隆盛期、日本バブル崩壊が節目節目にあって、英國、米国、フランスなどに並行した同じような報道内容、姿勢が見られる。

##### a) 第二次世界大戦後

アメリカでは真珠湾攻撃の日、終戦記念日にはかならず大量の日本関係記事が載り、JAPという呼び名、侵略という言葉が繰り返し使われる。英國で一番大きいのは英国人捕虜虐待問題である。日本人の残虐性が繰り返し語られ、更なる補償に

(25) Bryson, Bill. *Neither Here Nor There: Travels in Europe*, Minerva, 1991, pp.70, 71, 149. (引用部分近藤)

応じない日本、謝罪しない日本が特に毎年 VJ Day（日本に勝利した日）を記念する8月に多くの新聞テレビに登場して、一般庶民の対日観の形成に大きな影響を与えている。

### b) 日本経済隆盛初期（1970—90初期）

フランスではル・モンド日本特集で、日本の住居はウサギ小屋、日本人は「ワーカホリック」と書かれ、1997年のEU作成報告書にも加えられて定着。1991年クレソン首相は「日本人はアリだ。アリのように働く」と発言。一方アメリカ、英国では1970年代一時日本は良き模範、日本から学べという記事も出て日本経済賞賛、治安の良さなどが書かれるが、1980年後半貿易摩擦が激しくなると、侵略とかJAPといった戦時中使われた言語が再び使われ、日本の経済的侵略として語られる。メディアは日本たたきを始めて、ニュースはその道具となる。1992年宮沢喜一首相の「アメリカ人は仕事に対する倫理観を欠いている」と（理解された）発言がアメリカ中に火の嵐を巻き起こし、メディアは反日感情を搔き立てトップ・ニュースとする。ホンダの車をハンマーで壊す写真も出回る。「アメリカ製品を買おう」運動が広がり、世論調査でも反日感情が広がる。実は宮沢発言は誤訳だったことは学者たちも認めている。彼が言ったのは「ウォール・ストリートにおけるマネーレース業界、ジャンク債などの手っ取り早い金儲けには働く倫理観が欠けているのではないかと思っていた」というものであり、文脈から故意に切り離されて誤って引用された。当時のアメリカは喧嘩ごしで、日本に怒りをぶつける口実を探しており、メディアはこれに喜んで追従した、とチャールス・バレス氏は見る<sup>(26)</sup>。

その間オーストラリア、メディア王マードックは積極的な買収戦略で米国、豪州、アジアのテレビ会社や新聞社、映画会社を傘下に入れて、1981年英国メディア界に参入、タイムス、サンデー・タイムス、ニュース・オブ・ザ・ワールド、サンなどを次々ニュース・コーポレーション社の傘下に加え、商業主義的運営を始める。現在はアメリカに本社を移す。

---

(26) Burress, Charles. 『笑われる日本人』 NY：ジパング、1998、p.56.

### c) 1990年代, 冷戦終結

冷戦が終結すると海外の新聞はハード・ニュースにそれ迄のような多くのスペースを割かなくなる。傾向としては社会, 人々, 生活中心への関心に移行し始める。

### d) 日本バブル崩壊

1990年以降西欧のメディアは中国に関心をシフトする。日本駐在のジャーナリストは減少。日本への興味が失われていく中で, 記事をどう読ませるか, いかに娯楽の要素を入れるかが駐在するジャーナリストたちの課題となる。長期化する不況にもがき苦しむ日本を様々な角度から「あたかもサディスチックな喜びに浸るように」書き<sup>(27)</sup>自殺率の35%急増, ホームレス問題など暗い面ばかりを報道。ジョン・スノウのテレビ番組“Snow in Japan”もその一つである。その他オウム事件も多く報じられた。

フランスでは2001年「日本の崩壊」(ル・モンド), 「地獄のメカニズム」(ル・フィガロ), 「日本の不振」(ラ・トリビューン), 「日本はどこまで落ちるのか」(ヴェール・アクチュエル)が次々に報道される。

2002年の日本・韓国でのワールド・カップではスポーツ関係の記者も大勢訪日して新鮮な記事も目立ったが, ここでも [日本では気兼ねなく立小便, これは日本人男性の当たり前の行動, 満員電車はチカン, 叫ばれれば家に帰ってハラキリ] (デイリー・ミラー, 2002/5/25) のような記事も相変わらず書かれる。

英国でも活字離れが広がり, 新聞経営は楽ではない。部数を増やす為娯楽に流れる。部数増を狙って高級紙も柔らかい記事を増やし, 英国でも所謂タブロイド紙とブロード・シートの距離も縮まってきた。大衆紙の人気は依然強く, 主要高級紙4紙の部数を合わせても大衆紙, サン (340万, 2003年10月現在) の3分の2にしかならない。2003年11月にはタイムスも首都圏でタブロイド版の発行を始めた。ますますの大衆化が避けられない。

---

(27) Mayes, Tessa and Rowling, Megan. “Why Japan is Still Inscrutable”, *Gazette*, Vol. 7, No. 1, 1996.

## 2. その恣意性と歪曲性

同じようなステレオタイプが繰り返し使われているとは言え、ここ迄で見えてくるのはそれを書く側の国と日本とのその時点での政治的また経済的関りによって、同じ事でも「いかに評価するか」の価値判断が変わってくるということである。ある時期に「日本人の勤勉さ」として賞賛された資質は「アリのような日本」、「ワーカホリック」として侮蔑や哀れみの目で見られたり「過労死」という海外でもいまや「karoushi」で通用する言葉となって「自殺の増加」に直接結び付けられたりもする。自殺は「ハラキリ」と書かれることが多い。記事は読まれる国の読者、テレビならば視聴者の為に流される。それはどこでも当然のことだが、正しい事実を伝えよう、正しい情報で教育しようとする姿勢は既に存在せず（かっての BBC にはそれも目的の一つである、と明記されていた。現在でも BBC には素晴らしい報道が多いと思うが）、他国を使っての自国民の政治的操作の道具としたり、単に娯楽の材料とすることが多い。政治家自身が他国を使って人気取りや政治的効果を狙つての発言もする。フランス、『マッチ』誌は訪中国の際のサルコジ経済財務産業相（当時内相）の発言をすっぱ抜いている。「香港は魔法の街だが東京は窒息しそうだ…京都も何が素晴らしいかさっぱりわからない。有名な離宮も陰鬱だ」などと東京、京都を酷評。「率直に言って中国の方が日本より好きだ。」「相撲は知的スポーツではない。どうして整髪料で固めた髪を結った異常な肥満体の戦いに魅了されるのか、とにかく知的ではない」といった発言は2007年の大統領選に向け、親日家で好角家として知られるシラク大統領への対抗意識をあらわにしての発言と見られる（2004/1/14、日経）。後にこの発言を否定しているが、6月3日公表の世論調査では50%のフランス国民はサルコジ氏が大統領に相応しいと回答しており、国民の人気取りは着々と成果を上げていると報道されている（6/4、日経）。

### a) ギルの“Mad in Japan”

「狂気の日本」を再び取り上げてみよう。多くの日本人にとっては、なぜ突然英国人が日本をあそこまで否定的に書くのかは大きな驚きであろう。

### i) なぜ「広島」か？

最も不可解なのはこの点である。なぜ広島をあのような形で書くのか。これこそが英國人が「聞きたい声」なのだ、とギルがそしてサンデー・タイムスの編集長が考えたのはなぜか、という問い合わせから始めよう。

ギルの記事には日本に関する事実を伝えたいなどという意図は全くない。もう一度広島に関する部分を読みなおしてみよう。

広島を根こそぎにして14万人を殺し木造の家屋と木々を灰と黒い雨に変えてしまった原子爆弾投下は、今振り返って思えば、そしてあらゆることを考慮して言わせてもらえば、良いことだった…核時代のこの破壊的幕開けは日本の歴史の中で最高の出来事だ。

これを読んで日本人は一様に驚愕すると思う。原爆を落とした国や人々への恨みを過去のものとして、二度と同じような悲劇の犠牲者を出さないよう祈る象徴的な場所が広島だ、と日本人は思っている。それが何故このような形で書かれるのか。戦後の日本の平和主義は海外には理解されていないのか。実は「広島」は日本人が期待するような形で海外に登場しているわけではない。

今回歴史上初めて日本の自衛隊がイラクに送られた時エジプト最大の原理主義組織、ムスリム同胞団は「米国に原爆まで落とされたのになぜ日米同盟重視なのか」と疑問を呈したという（2004/2/22、日経）。またアルジャジーラの「外国人誘拐」に関する討論番組で「日本人は広島に原爆を落とされたのでアメリカを恐れている。それでイラク派兵を決めたのだろう」といった発言がされている（4/13、NHK）。日本人人質解放に骨折った聖職者協会のクベイシ師が16日「アメリカは広島、長崎で日本を苦しめたときと同じ事を今ファルージャでイラク人に対して行っている。日本はもっと強い立場にたつべきなのに、唯一イラクだけがアメリカに反対しているのが現状です」と述べている。ムハマンド・バッシャール・アルフェディ師が明らかにした犯人グループのメッセージでも広島、長崎に言及している。突然のように外国で連発される「広島」に驚いた日本人は多かったのではないか。しかしアジア経済研究所の池内恵氏によると、中東諸国全般で反欧米の国々の新聞報道には頻繁に広島、長崎への原爆投下が取り上げられるという。特に湾岸戦争のイラク国営テレビでは連日アメリカの非道残虐さを訴えるビデオが延々と流され、その中心と

なりクライマックスとなるのは原爆の映像であったという。また中東のどの国でも8月6日の広島平和記念式典を報じる。アメリカの行った「子供、女性、老人も巻き込んだ原爆投下」は西欧の「テロリズム」の定義そのものなのである。この議論でいけば、原爆投下がテロでないのならば西欧の非難する「現在のイスラム圏のテロ」もテロではない。こうして原爆はアメリカ人に対するジハードを正当化する切り札として使われている。これがアラブ諸国に広く浸透している常識的な広島理解であるという。広島を持ち出すことによってテロに対する稳健、妥当な批判までが無力化してしまうこの論法はアラブ世界の言語空間では非常に効果があるという<sup>(28)</sup>。

あまり積極的に国際的発言をしない日本が唯一発信するのは「広島を世界へ」という戦後平和運動のスローガンであるが、具体的に何を伝えたいのかが明白でなく、「唯一の被爆国である日本が」の帰結が「故に核兵器を決して保有しない」は他国にとってそれ程自明ではない、と池内氏は言う<sup>(29)</sup>。

一方日本では「平和のメッセージが伝えられている」と思って「ビキニ被爆50周年」の記念日には核の廃絶を訴える全国の平和団体や学生が「No more ビキニ」の誓いを新たにし全国で原水爆禁止を求める署名運動が広がる。ギルが広島を訪れた時求められた署名というのはこうした種類のものであったろう。しかしギルは「アメリカに原爆投下を謝罪させる」為の署名を求める執拗な日本人、犠牲者の国をアピールする日本、と解釈する。アメリカの日本への原爆投下後、英国はドイツへの投下を考えていた模様で、その事実は英國の新聞にも報道されている。西欧の読者たちにとって「広島」は耳に心地よい響きを持たない。ましてこれ程に事あるごとにアラブ側から非難され続け、西欧のイメージは傷つけられているのである。「あのお陰で世界大戦を終わらせたのだから」というのが原爆投下を正当化する精一杯の論法である。それを堂々と高級紙の上で公言して決めつけるギルは頗もしい、と苦笑しつつ英國の読者は読んだのかも知れない。日本では今でも遠距離被爆者の4割は癌を患っている、という調査報告がある<sup>(30)</sup>。ここでギルは書く。

戦後被爆生存者は追放された。人々は間違って被爆者と結婚などせぬよう

(28) 池内恵「アラブ世界」、『日本はどう報じられているか』石澤靖治編、5章、新潮社、2004、pp.132-140.

(29) *ibid.*, p.141.

(30) 「日本原水爆被害者団体協議会報告」2004/5/23、日経。

に探偵まで雇った。生存者は嘘についてその罪深い秘密とトラウマを隠した。不完全で汚れた恥ずかしい存在である彼らは死ぬべきだったのだ。西洋人の持つ愛情、兄弟愛、慈善の愛、また官能的愛が日本には無い。その欠如が日本の恐るべき狂気の残虐性を説明する鍵である。

被爆の原因を作った西洋には兄弟愛、慈善の愛の心がある、日本側には狂気の残虐性がある、とする論理を英国人はどう読むのだろう。当時の日本駐英大使からの抗議の手紙にサンデー・タイムズの編集長は「冗談ですよ」と答えたと言うが、傷つく日本は「冗談すらわからない人間」として二重に切り捨てられるのである。

実はこの広島の部分は、「被害者ぶるが本当は日本は加害者なのだ」という展開への導入部なのである。日本の戦争捕虜虐待、中国人虐殺、韓国人慰安婦、強制労働、それらに対する謝罪の拒否、教科書問題へと続く。

この記事が書かれた月、9月は重要な意味を持つ。VJ Day（日本に勝利した日）のある8月には毎年記念祝賀について百以上の新聞が記事を載せるが、合わせて日本の謝罪問題についてもふれる。英国の元捕虜への賠償問題については、元捕虜の側からの発言とメディアからの反応、日本批判が載る。「日本人は戦い好きだ。野蛮で統制がとれていて人種差別を平氣でする。彼らが最後に謝罪したのはミズリー号のデッキで、長崎が灰になった時だ」<sup>(31)</sup>と書いて原爆を使ったことの正当性を暗示する記事もある。対日戦争の重さは大英帝国にとって大きな衝撃であり、「英國にとっての最悪の日はいつですか？」という読者の問い合わせに「シンガポールで大英帝国軍が日本軍に降伏した1942年2月15日である」と一英紙が答えていることを土生修一氏は報告している<sup>(32)</sup>。「それはこの敗北が世界全体の目に英国が帝国としての意味を失った日と映ったからだ。オーストラリア、ニュージーランドはこれ以降英國に頼れなくなって自立し、他の植民地も後を追う。国内的には心理的衝撃を与え、英國人が自分たちを小さな島でつましく暮す国民として考え始めるきっかけとなった」<sup>(33)</sup>とデイリー・ミラー紙は解説している。日本との戦争は英國にとって屈辱的であり、同時に西側の原爆使用には幾ばくかの罪悪感もあるのだ。あまり触

(31) Clark, Alan 議員, The Daily Mail, 1995/8/20.

(32) 土生修一, 「イギリス」, 『日本はどう報じられているか』 p.22.

(33) The Daily Miller, 2002/10/23.

れたくは無い「広島」に堂々と触れて、「原爆投下は結局は日本の為にもなった良い事なのだ」と自分の責任で大新聞で宣言するギルに「なんと思い切ったことを言うのだろう」と首をふりつつ自分では口には出せないことを代弁してくれた記事に、我知らず昂揚する気分で日曜を過ごした読者は多かったのかも知れない。読者からの抗議の手紙にギル擁護の返事を送った編集者は事実こう記している。「彼の見解は受け入れられぬと書いてきたのはあなただけではありません。しかし多くの読者はギルの觀察を本気にはしないまでも、またかなり風変わりだと思ったとしても面白がって読んだと私は確信しています。」<sup>(34)</sup>

ギルの記事が JAPAN 2001 の最中に出たことは日本人にとってはショックな出来事である。しかしこの期間だからこそ出た幾つかの肯定的な日本記事で VJ Day の夏を埋めさせてはならぬ、それでは英国人は満足しない、正反対の記事を出そうとギルや編集者が考えたとしても無理はない。より注目も浴びたであろう。確かに JAPAN 2001 の間好意的な記事が多かった。ファイナンシャル・タイムズは JAPAN 2001 開幕前の 5 月 5, 6 日 24 頁を割いて日本特集号をウイークエンド版に載せ、様々な行事、日本社会の現状、ファンション、日本食などについて好意的に紹介、6 月 5 日には松竹歌舞伎近松座公演について「人間国宝の演技を堪能するまたとない機会」と題して「これほど多くを語る深みのある舞台は、今年のロンドンではまず見られないだろう」と絶賛している。10 月 13 日「すべては古代日本に始まった」と題して古代日本の美術展（国宝、重要文化財を含む 110 点）を二段組みの特集記事で掲載。また 10 月 18 日付では『もののけ姫』を絶賛して写真入りで大きく取り扱っている。2001 年 4 月にはオブザーバーが『ライフ』で 70 頁に亘る日本特集号を組み、すでに英国でもお馴染みとなった食物、アニメ、ファンションなどについて日本を好意的に伝えた。こういった特集や記事を読んで行事に参加したり開場に出向いた人も多かったであろう。勿論この時期だったからこそ、ある程度一般人も日本に目が向いていてギルの記事は「面白かった」のかも知れない。記事が触れているテーマ、仏教、神道、京都、石庭、歌舞伎、日本建築、武芸などは JAPAN 2001 の文化紹介内容でもあり、サンデー・タイムズの読者である中流知識

(34) Morgan, Robin. Editor: The Sunday Times Magazine, 2001/10/1. (引用部分近藤訳)

人の興味の範疇でもある。肯定的に日本を描く多勢の中で逆の効果を狙ってほぼ完全な日本否定論を展開したギルの記事はバラエティーが必要だという観点もあったかも知れないし、事実新鮮でもあったろうが、私はここに英國のシニカルな一面を見る思いがする。

## ii) なぜサンデー・タイムスでの掲載か？

ギルの記事について、大変穿った見方であるが、英國の大学のジャーナリズム学科で学ぶヘレン・トマス氏は記事発表時期とメディア王マードックの対日事業戦略の失敗とを結びつけている<sup>(35)</sup>。マードックは先に述べたように1981年英國メディア界に参入、タイムス、サンデー・タイムス、大衆紙のサンなどを傘下に加え商業主義的運営を始める。マードック会長は巨大市場の日本に注目、ソフトバンク社と合併して、TV朝日の大株主旺文社の子会社を1996年6月に買収、日本でのメディア覇権争いの始まりと言われた。狙いは「JスカイB」構想で、TV朝日の持つ放送事業のノウハウを得たいと思ったようだが（1996/6、朝日）、日本では「外国人の役員就任は電波法で認められない」ことから役員送り込みが出来ないとわかって、1997年株を朝日新聞社に売却。後JスカイBはパーカーTVと合併、スカイパーカークトTVとして発足。しかし自由な報道や公正な評論を損なわないか、と日本側が警戒し、思った以上に日本国内の反発はマードック参入に対して大きい、とマードック氏自身も感じていたらしく、その全株も市場で売却、その一部はCX、ソニーへ移った。現在は委託事業者としてJスカイ・スポーツやFOX関連ソフトを放送するのみである。米国でも英國でも参入に大成功したマードック氏にとって、日本は手痛い失敗例である。ギルの記事は2001年9月であるからマードック氏は上記の結果はまだ見ていない。後に詳しく述べるようにマードック氏を迎えたサンデー・タイムスの内部にも初めこそ大きな軋轢もあったが、彼は反マードック勢力を崩し、サンデー・タイムスの編集長も自分に言いなりの人物に挿げ替えて既に編集方針にまで口を出せる体制に仕上げている。JAPAN 2001の間をねらって日本に「仕返しをした」<sup>(36)</sup>としてもそれ程驚くことはないだろう。依頼されての記事だったという

(35) Thomas, Helen, "The Sunday Time", 未出版論文.

(36) *ibid.*しかし新聞社としては唯一 The Times は Japan 2001 の助成団体の一つである。

ことか。“Mad in Japan”には日本大使からの抗議があったが、その後の2002年にサンデー・タイムスに謝意を表しながらギルは日本記事を含め幾つかの旅行風記事を集めて出版 (*A. A. Gill is Away*) している。人気が出て更に翌年今度はペーパー・バックで再版した。いかに売れているかの証である。

新聞記事はその日の読者に読まれ、多くの場合保存されたり書棚を飾ることはない。記事は書籍として改めて出版された時いわば人目にも触れる永遠の生命を得る可能性を持つのである。こうしてギルの記事も「時」に支配されることのない領域に入ったのである。文学の批評家たちは「永遠の生命を持つ」（と仮定される）作品を批評対象とする。ここは「冗談ですよ」とか「人はすぐに忘れてくれるから」といった弁解は通用しない世界である。だから私はギルの記事を公の批評、批判対象とする。

#### b) 発表時期と記事内容の符合性

##### —クリストフ（ニューヨーク・タイムス）の日本記事を一例に—

メディアであるから当然なのだが、なぜ今日本をこんなテーマで、と首をかしげる記事も実は「時」を選んで書かれているのである。それが日本駐在のジャーナリストによって書かれたものであれば、その記事を載せることを決定する本社の編集長が「この時期に読者はこういった記事を待っている」として選んでいるのである。それ程に計算もされて記事は出るのである。その一例として1995年から1998年迄ニューヨーク・タイムス（以下 NYT）日本支局長であったクリストフによって書かれた記事を紹介しよう。クリストフは日本の前は中国に駐在し天安門事件報道でピュリツァー賞を受賞したジャーナリストである。日本にいる間本国に送りつけた記事は当時ニューヨーク在住の日本人ジャーナリスト、学者、芸術家たちにとって耐えがたい程の日本蔑視とも言える歪んだ記事であり、彼らはジパングというグループを結成し、クリストフ記事への批評、批判をアメリカの日本学者、ジャーナリストも巻き込んで和英バイリンガルの『笑われる日本人』(*Japan Made in U.S.A.*, 1998) を出版した。日米を問わず大學のジャーナリズム学科、文化研究学科、国際学科などの授業のテキストとしても使われているという。クリストフ記事に関してはこの本の幾つかの部分を纏め、要約して紹介する。

1995年11月5日クリストフによる“日本女性が読む野蛮なコミックス：マス・マーケットの女性用レイプ・ファンタジー（“Brutal Comics for Women: Mass-market Rape Fantasies for Women”）”という記事がNYT紙日曜版一頁目に載った。『アムール』という女性向マンガについての記事であるが、この中に女性が強姦され、結果的にはそれを楽しむシーンが三例ある、として「日本女性のレイプ願望」を普遍的なことと位置付けている。ジパングのインタビューの中でマット・ソーン氏（文化人類学者、マンガ研究家）は「この記事は日本女性たちは既に自らに内在化した女性嫌悪に苦しみ、性差別のステレオタイプに縛られるあまり、男性が女性たちに抱く幻想—強姦—を体現するまでに至っている、とクリストフは言いたいのだ。」<sup>(37)</sup>と解説している。事実背景のリサーチもしない実に杜撰な記事だとソーン氏は言う。日本女性のレイプ願望はチャネル4の番組「マンガ・エロティカ」の一テーマでもある。

実はこの記事が出る一ヶ月半前には沖縄の12歳の少女3人がアメリカ兵に強姦されるという事件が起きている。記事の中でクリストフは沖縄のこの事件を例に挙げて「実際に強姦事件が起きれば日本人は憤慨する」と書き、あたかも「いつもレイプ願望の妄想を抱いているくせに」という印象を与える書き方である<sup>(38)</sup>。沖縄の事件に対しては11月1日にペリー国防相が謝罪、7日には加害者3人が誘拐、強姦容疑罪状を認める。クリストフ記事は5日に出ている。19日にはマック米軍太平洋軍司令官が「レイプなどせずに女を買えばすんだのに」と発言し、それで辞任、という経過をたどる。クリストフ記事を大きな図版付きの長文の記事にして注目度の高い日曜版のWeek in Review Section一面に掲載したのは、実は記事の「売り」が西洋男性の東洋女性への幻想に呼びかける効果にある、とソーン氏は見る<sup>(39)</sup>。アメリカの読者はアメリカ兵の少女強姦という現実から目をそらして、この記事を娯楽として読むことが可能だということか。これが計算だとしたら、なんというしたたかな計算であろうか。

(37) Thorn, Matt. 『笑われる日本人』 NY: ジパング, 1998, p.101.

(38) 森重優美, 『笑われる日本人』 p.10.

(39) Thorn, *ibid.*

## IV. New Journalism の中で多様化する日本イメージ

### 1. ニュー・ジャーナリズム

#### a) ニューヨーク・タイムス(米国)とサンデー・タイムス(英国)に何が起きたのか

今まで見てきたような徹底した「読者の喜びそうな、関心を持ちそうな」記事を載せるのが、英國で言えばタブロイド紙のサンやミラーであったり、娯楽専門の低俗な新聞雑誌だけであるならば、さして驚く事はないし、また正面からこれを取り上げて問題とする必要はないかも知れない。しかしギルの特集記事、クルストフの一連の記事は双方とも一流の高級紙、サンデー・タイムスとニューヨーク・タイムスに掲載されたものなのである。真実に近い事実を踏まえた報道であろう、と読者が考える発信元の記事なのである。どれ程の権威を持つ新聞社であるかを少し説明する。

#### i) ニューヨーク・タイムス

アメリカには政治報道に関して政府から別格の待遇を受ける新聞社がある。その中でもトップの情報が出てくるのはニューヨーク・タイムスとワシントン・ポストである<sup>(40)</sup>。NYTは、自他共に認めるアメリカ・ジャーナリズムの最高峰であり<sup>(41)</sup>、事実を記録する新聞、アメリカで最も影響力の強い新聞であり<sup>(42)</sup>名声があり、中層階級が平均的読者である新聞で<sup>(43)</sup>、他紙よりも最も多く日本報道を行う。NYTの支局長は外国での日本イメージを形作るのに最も影響力がある存在であり<sup>(44)</sup>、このイメージ、記事はニューヨークから世界に向けて発信されて多大な影響力を持つ。アメリカの外交問題専門家の大半が国際ニュース源として信頼を置いている<sup>(45)</sup>。こ

(40) 石澤, *op. cit.*, p.126.

(41) Burress, *op. cit.*, p.51.

(42) Gluck, Carol. 『笑われる日本人』 p.85.

(43) 角田由紀子, 『笑われる日本人』 p.78.

(44) Burress, *op. cit.*, p.51.

(45) Hein, 『笑われる日本人』, p.118.

の NYT お墨付きの記事を読むと人はすんなり信じ込みかねない<sup>(46)</sup>、といった新聞なのである。

1995－1998年まで日本総支局長をニコラス・クリストフ記者が務めた。既に経済に関してのバッシングが必要な時ではない。しかしここで書かれる日本関係の記事は日本内でも批判が多く、特にクリストフが支局長の間はそうであった。商業主義に徹し、啓蒙的視点は皆無、記事の消費的価値を高めるのに専念し<sup>(47)</sup>、他紙に較べ日本を最もエキゾチックに描き<sup>(48)</sup>、繰り返し現れる奇妙な偏見に犯されているとまでバレス氏に言わせた<sup>(49)</sup>。「我ら（アメリカ）」に対する「彼ら（日本）」は不可思議、理解しがたい「他者」とする線引き論調の典型で、日本人は病的で奇妙という主張はクリストフが書く記事全般に一貫して出てくる。これはあからさまな戦略で、これで売れる、とソーン氏は言う<sup>(50)</sup>。似たような記事で再生産を繰り返し<sup>(51)</sup>、読者が事実に反するとして反論を書き送っても NYT は無視するという報告も多い。

“アモール”記事の誤りを指摘したマット・ソーン氏<sup>(52)</sup>、“水子地蔵”への角田由紀子氏の反論<sup>(53)</sup>、1997年の赤島を取り上げて過疎地に浪費される補助金で日本は衰退すると主張したクリストフ記事に対する外務省沼田貞昭外務報道官の反論の投稿も掲載されなかった<sup>(54)</sup>。“外国プレスは輝きを失った日本を去る”という記事もあまりに事実と違うとして高島肇外務報道官が反論を投稿したが、これにも反応はない。報道は「事実をして語らしめる」のが基本なのに NYT の記事は始めに主題ありき、材料は後からはめていく。日本人もそろそろ NYT 紙信仰を卒業する時だろう、と産経新聞論説委員千野境子氏は警告する<sup>(55)</sup>。

---

(46) Thorn, *op. cit.*, p.104.

(47) 池田啓子、『笑われる日本人』、p.110.

(48) Gluck, *op. cit.*, p.85.

(49) Burress, *op. cit.*, p.51.

(50) Thorn, *op. cit.*, p.103.

(51) 上野千鶴子、*op. cit.*, p.78.

(52) Thorn, *op. cit.*, p.105.

(53) 角田、*op. cit.*, p.113.

(54) 千野境子『世界は二本・アジアをどう伝えているか』連合出版、pp.38－39.

(55) *ibid.*, p.246.

## ii) サンデー・タイムス

ギルの“Mad in Japan”を掲載した英國のサンデー・タイムスはどうか。英國で權威ある新聞社である。特にハロルド・エバンスが編集長であった間（1967-81; The Times 1981-81）はサンデー・タイムス・インサイト・チームを擁する「正義の黃金時代」と呼ばれた。この新聞が公衆の利益のみを追求することを可能にしたのは一般受けを求めず、経済的損失や部数の減少に耐える基本的姿勢を貫いたからである、と後にエバンスは書いている<sup>(56)</sup>。しかし1981年にはルパート・マードックがサンデー・タイムスを買収、その年から1986年の間に100人の優秀な記者が、編集へのマードックの介入と彼の路線に失望して社を離れた。エバンスはサンデー・タイムスからタイムスへ移るが、一年後に辞職、エバンスの後をついでサンデー・タイムスの編集長となったフランク・ガイルスも押し出される形で、マードック自身が選び彼のやり方に追従するアンドリュー・ニールに席を明渡した。マードックは編集長たちと短期契約しか結ばない、編集経費を固定しない、といったやり方で編集をコントロールし続けている<sup>(57)</sup>。辞職していくのはトップの人間に限らない。マードックに反旗を翻す記者たちの主張を通した編集者たちも配置換えされた。商業的利益優先の状態は現在も続いている、新聞界ではマードック氏のメディア買収の動きに対する反発の声があると聞くし、また毅然としてこれを退けた日本の動きを歓迎する向きもあるという。

## b) ニューニューニューニュースの寵児、クリストフとギル

### — ハード・ニュースからソフト・ニュースへ —

冷戦終結後、ニューヨーク・タイムズ外務部編集長、ベルナルド・グワーツマンが1992年11月配布したレター用紙6枚に亘る社内メモがそれ以降のNYTの国際ニュースをがらりと変えたといわれている。冷戦構造時代は政治的ハード・ニュースが花形であり一面のスペースを他の部と奪い合ったものだが、今やハード・ニュースの影は薄くなり掲載される回数も減ってきた。この変化への焦りから新編集方針を打

(56) Evans, Harold. *Good Times Bad Times*, London: Weidenfeld & Nicholson, 1983, p.170. (引用部分近藤訳)

(57) Thomas, *op. cit.*, p.4.

ち出したと思われる。内容は、これからはエコロジー、民族紛争の歴史、経済発展も対象にして欲しい。特に興味があるのは社会に違いを作り出すもの、任地での生活の異なる側面を手紙を送るつもりで書き送れ、こういった特ダネを歓迎する、としてスクープを奨励した。

この形のジャーナリズムが「グワーツマン・メモ」によって始まった訳ではない。既に1960年代半ばにアメリカではニュー・ジャーナリズムは誕生している。客観的情報を提供し、冷静かつ古典的構造で書かれた新聞報道が徐々に姿を消してジャーナリストの経験を主観的に書く形に取って代わった。個人の「意見」が主流となつたのである<sup>(58)</sup>。グワーツマン・メモはそれ迄当然のこととして客観的事実が重んじられた外信部の記事もいわゆる特集記事（Feature story）に変えていくという大胆な変革を迫ったのである。

1995年に NYT 日本支局長となったクリストフはメモについて「私はその変化を大いに信奉しているので、ある程度それを日本で実行しているわけです」と言い、これがジャーナリズムの「再定義」なのだと言う<sup>(59)</sup>。メモの求める「任地での生活の異なる側面の印象を」というのは一記者の主観的な目に異文化観察や評価を委ねることになりかねずチェック機能が全くない。

一方このニュー・ジャーナリズムは3、40年を経てタブロイド紙は言うに及ばず英国の主要メディアにも深く浸透して來た<sup>(60)</sup>。冷戦後の国際ニュースのページ数の減少、日本バブル崩壊後の中国へのシフトなどの状況はアメリカと同じである。アメリカでクリストフがグワーツマンの社内メモの信奉者としてその期待を十二分に發揮したとするならば，“Mad in Japan” のギルはマードック色で染まった当時のサンデー・タイムスの編集長、マードック・ラインを忠実に継承しマードック自身によって選ばれたアンドリュー・ニールの目にとまって世に出る<sup>(61)</sup>。多くの優秀な記者が辞めていったサンデー・タイムスの「恐怖の時代」(Peter Wilby 記者)、ギルはその世界で寵児となった。幾つかのジャーナリスト賞を受け、サンデー・タイ

(58) Child, Heather. “Journalism as a Ritual Sacrifice: A Response to A. A. Gill’s ‘Mad in Japan’”, 未出版論文.

(59) 栗原奈名子「クリストフ・インタヴュウ」『笑われる日本人』, p.35.

(60) Child, *op. cit.*

(61) Gill, “How it Works”, *A. A. Gill is Away*, Phoenix, 2002, p.6.

ムスの他にも名声高い雑誌に書き、「うなる程の金 (disgusting amounts of money)」と誇らしげに自ら言う大きな報酬を得ている<sup>(62)</sup>。タトラーの記者時代編集者から教えられたのは「面白おかしく書け、第一人称で書け」ということだった。ここで自分のスタイルを確立してサンデー・タイムスに移りアンドリュー・ニールの目をひいた。何をしたいのか、と聞かれて「いろいろな場所をちょうど人にインタビューするような形でインタビューしたい」と答えた。“Mad in Japan”はその成功例の一つである。

ある地域や外国を記事にする時も、決してリサーチをしない…自分の考えに他人のものを加える気はない。自分の偏見を大切にする。自分が書くのは本質的に自分の「印象」である。この印象は生き生きとして自分を驚かせるようなものが望ましい。自分にとってのジャーナリズムとは、すべて「物事の表面」に関することだ。誰の意見だって同じ価値を持つ…自分は色彩を見せる。メモも取らない…第一人称で書くからこそこんなことが出来るのだ。これは私の声、私の見方、私の意見だ。人の意見の方が自分ものより価値があるなんてことはあり得ないし、またその逆もない。どこにも絶対的見解などあり得ない…意見も偏見も理論も新事実も、すべてその時の社会的、知的な環境によりけりだ<sup>(63)</sup>。

彼は自らをジャーナリストであると自負して繰りかえし言う。

自分の前には何百万という読者がいる…このインパクトは大変なものだ。ニュースや情報がなければ暗黒時代へ逆戻りだ。だから新聞は詩より、小説や劇、音楽、絵画、舞踊より重要なのだ…自由な新聞の概念なしに民主主義はない。これこそが自由市場の絶対条件だ。それが無ければ無知の上に築かれた噂と憶測しか無いのだ。言論の自由の上にのみ人間の権利と自由がある。ジャーナリズムはチームワークだ。新聞の力はその積み上げだ。一緒になって人間の最も価値あるものを創り上げているのだ<sup>(64)</sup>。

しかし真実あってこそ言論の自由は保障されるべきなのだ。彼の言論の自由論は

---

(62) *ibid.*, p.170.

(63) *ibid.*, pp. 3-11. (引用部分近藤訳)

(64) *ibid.*, p. 2.

自分を庇う隠蓑のように聞こえる。この発言と“Mad in Japan”の実体との間にはあまりの距離がある。

なぜ僕がジャーナリストであることが好きかと言うと、記者は一つのチームの先っぽの一点だという点だ。自分には属している場所があり、新聞全体で自分を支えてくれているという実感があり、どこまでも聞こえる大声を持ち自信に溢れた力の一部だ、という感覚が持てるからだ<sup>(65)</sup>。

自分の dyslexia（人が読めるように文字を書けない症状）に関して「これは自分の問題じゃない。読めないアンタの問題だ (It's your fucking problem)」と教師を怒鳴りつけたという態度は彼の記事を「理解」出来ない読者に向けての言葉でもあろう。

彼とのチームワークを支えてくれている筈の編集長は、一旦事が起こればチームメートとして彼の責任を取ってくれるふうでもない。“Mad in Japan”の記事に憤慨し、抗議の手紙を書いたウエールスの女性に対しサンデー・タイムズ・マガジンの編集長ロビン・モーガンは次のように返答している。（この手紙はギルの記事に異議を申したてる手紙—多分日本大使からのものも含め一のすべてに送られたスタンダード・レターのようである。）編集長はギルの記事を「彼の印象記」と書く。

もし政治家、僧侶、裁判官、将軍があのような見解を述べたならば恐ろしいことです。彼が単なる物書きだったことは幸いでした。彼はステレオタイプと偏見を明らかにし拡大し、そしてそれを鏡のように読者に翳してみせたのです。それを通して読者は自らの見方を疑問視したり評価することとなるのでしょう。

書いたことに事実の裏付けがあるかどうかは「物書き」には求められないものらしい。ここで編集者がギルを「ジャーナリスト」と明言しないのは意図的であろう。一人称で書いていないとは言え、「手紙」を送るつもりで書く NYT のクリストフ記事はほぼギルのものと同じような効果を持つ。また双方とも記事は署名入りである。署名入りでないから日本の新聞記事には個性がないという批判はあるが、また最近は署名入りも増えてきたとは言うが、それには賛否両論あると思う。署名入

---

(65) *ibid.*, p. 211.

り記事は新聞のスペースを奪い合う記者仲間との競争を勝ち抜いて自分の名前を売り込む機会である。目立ちたいであろう。署名がある時編集者は自分が選択した記事であるにも拘わらず責任は記者個人にある、というように一歩退く。「これが社を代表する考えです」とは言わない。編集者が常に用意している言葉は「読者の多くがこの記事を楽しみ、喜びました。読者が欲しがっている記事なのです」であり、あたかも責任は読者にあるかのようである。署名の無い記事を読んだ時読者はこれは社を代表する考え方であろう、そのリスクは社が取ってくれるのであろう、と思う。先の編集長は「ギルの記事には数多くの反論が寄せられ、その大半はギルこそが狂っているのではないか、といった内容のものでした」と人ごとのように言う。

クリストフは「自分は中国、香港、ロス赴任当時から賛否両論の投書をいつも山のように受け取ってきた」と言う<sup>(66)</sup>。ギルも「自分は挑発的過ぎる」とショッちゅう非難されるが、これは「讃め言葉」と受け取っていると言う。クリストフは記者の本能は「異なったものを選ぶこと」なので「いつも異なったものに焦点を置く。カリフォルニアを描く時もニューヨークとは異なるところを見ようとする。その為によりエキゾチックにする。これが記者の本性なのだ」<sup>(67)</sup>と言いますが、これはギルが自分は第一印象の強烈さのみを信用するという態度と共通するものであろう。彼らの描いた日本はその「成果」である。「日本人は異人種である、他者であるという図式での捕らえ方が、第二次世界大戦中日系アメリカ人のみを強制収容所に送ったのではないか？その危険はないのか」というジパングの問い合わせに対してクリストフは「それはある」と初めて認めている<sup>(68)</sup>。記事の中で対象となる日本人が記者の理解を超えた「他者」であり続けては深層にせまる（と見える）記事は書けない。ここでしばしば用いられる技法は、名前を載せて日本人を登場させ、その生の声を通して日本を伝える形である。これで具体性と客観性を与えられる、と考えているようである。しかし「一人の具体的な人間を日本の代表として使うのならば、代表とする客観的裏付けが必要なのに、それはない」という批判が出て当然である<sup>(69)</sup>。クリス

(66) Kristof, 「クリストフ・インタヴュウ」『笑われる日本人』 p.42.

(67) loc. cit.

(68) loc. cit.

(69) 梅沢葉子, 『笑われる日本人』 p.11.

トフのすべての記事にはウエムラ・ユリとかマキモト・ユカという名入りの人物が登場する。ギルの「日本観」とのバランスを取るように恣意的に置かれたレスリー・ドウナーによる「日本人の英國観」もケイコ・タカオの発言に終始する。

ギルがサンデー・タイムスに書き始めた頃とクルストフが日本支局長になって日本記事を書き始めた頃は時期的に不思議に符合する。この時代とはハード・ニュースからソフト・ニュース中心に移行した時代であり、ある意味では読者層におもねるコマーシャリズムが表面に出てきた時代でもある。その中心となり花形となったのはフィーチャー・ストーリーと呼ばれる特集記事である。普通の記事より多いページ数が割かれて注目を浴びる。記者にとっては腕をふるうに絶好の場である。これが一面にでも載って人気が出れば記者の名前も読者の記憶に残る。こうして記者は有名になっていくのである。特集記事は基本的に単純な情報を流す媒体ではない。いかに読ませるかが最大の課題となるので、面白くウケが良さそうなテーマを探す。日本記事で言えばほとんどが日本で出た記事の後追いで、日本の週刊誌のきわどい記事がセンセイショナルに外国の日本報道にまわることが少なくない<sup>(70)</sup>。ジパングが選ぶ「NYTが見た日本ワースト10」の半分が日曜版に載っている。一番広いので読んでもらえて、書き手も脚光を浴びる。“コンピューター時代いまだにさまで狐つき”では迷信深い日本人を、“日本女性が読む野蛮なコミックス”で日本女性のレイプ願望を扱う。彼の妻の書いた“痴漢がのさばる東京の満員電車”などは世界中にその話題を提供した。これ等は「ワースト10」の一部である。一方のサンデー・タイムスは当然日曜版であり、ギルの記事が載ったマガジンは写真入の大判である。

この二人が代表する大きな変化をより広い舞台で眺めてみよう。NYTの新しい方向性を示したグワーツマンの社内メモが書かれたのが1992年末、冷戦後の外信部の生き残りをかけたものだった。それから6年後の1998年BBCニュースは「それ以降のメディアが伝える主力ニュースのカテゴリー」を明確にし、「私たちが使えるニュース」と題してBBC内部向けに新しい「戦略ドキュメント」を出した。「これからは消費者向けを中心に、生活スタイル欄を発信する時代だ。これは英国の真面目な新聞にとっては嘆かわしい質の低下で、政治的発言も出来ぬ無言の大衆

(70) 大竹秀子、『笑われる日本人』p.72.

をつくる、と悲観的に見る向きもあるだろう。一方知的な、また文化的な知識への広がりを歓迎する向きもありだろう」<sup>(71)</sup>と述べているが、興味深いことにちょうど時を同じくして NYT のクリストフは「NYT は最近くだらない記事を載せるようになったと批判する人がいる」ことを認めている<sup>(72)</sup>。もっともこれは主に彼の書く記事に対しての批判であろうが、こういった歴史的方向づけが新聞、メディアの質の変化に大きく関係していることは事実である。新しい方向の特徴をさぐってみよう。

### c) 特徴と問題点

#### i) コマーシャリズム

記事は消費者向け商品である。ブランド名は人気を呼ぶ。クリストフによる記事とギルのものとが、また二人の書くという作業に対しての姿勢、価値観、内容が非常に似通ったものであることを見てきた。彼らの書くものがいわゆるフィーチャー・ストーリーと呼ばれるものの特徴を持っていることを述べた。ギルの記事，“Mad in Japan”の中に見られるほぼすべてのテーマはクリストフの記事の中にもある。勿論両者共に日本報道の典型だから、といえばそれで説明はつくが、ギルの記事で「なぜその結論が出るの？」と聞きたくなる箇所はクリストフのものを読むとそこに具体的な根拠と説明が見出されるのである。クリストフは3年間日本から記事を送り続け、ギルのものはいわば一発物である。クリストフの記事の中でギル好みのものを並べてそれをギル自身のセンセイショナリズムで繋ぎ合わせれば“Mad in Japan”が出来上がる、という大胆な憶測が可能なほどである。例えば「日本に愛はない」とするギルの主張はあまりに突飛で説明不足だが、クリストフの“人生のよき時も悪しき時も日本の夫婦に愛なんて要らない”で主張している「アメリカと比らべて日本の結婚が長続きするのはアメリカ人が大切にする愛が日本では重要なからだ」という記事を読むと、成る程この接点でギルは妥当だと考えたのか

(71) *Reporting Japan: From Sun-rise to Sun-set, Japan in Britain's Newspapers, 1990 – 2000*, Wales Media Forum, 2001, p.29.

(72) Kristof, 「クリストフ・インタヴュウ」, p.52.

と納得する。ニューヨーク・タイムスとサンデー・タイムスは双方共に有名な高級紙であるから当然様々な接点はあろうが、日本関係でも小さな接点はある。マードックが日本でのインタビューで「朝日新聞との友好関係はロンドンのタイムスを通じて築いてきた」と語っているし（1997/3/4, 朝日），NYTは朝日新聞のビルの中にオフィスを構えていて関連が深いのである。ギルの出版した本の中で“Mad in Japan”は，“東（East）”のセクションに、イスラエル、ウズベキスタン、カリニングラード、インドと一緒に並べられている。ギルの説明ではこのセクションは實際には行ってみたくもなかった場所であるという<sup>(73)</sup>。日本について書くことを依頼されたギルが、大急ぎクリストフの記事を読み漁った可能性はあるだろう。クリストフの記事は外信部に送られる特派員記事であるが、フィーチャー・ストーリーの特徴を余すところ無く持っている。ギルの場合はその出発点から先の「BBC 戦略ドキュメント」にピッタリの人材なのだ。彼は辛辣なレストラン批評家でもある。ゲスト・ドレッサー8位に選ばれたと自慢し、ファッショնへの関心もある。それなりの人気もあり、多分悪名も高い有名人（celebrity）である。「ドキュメント」以降の記事や番組は、有名人へのインタビューを中心に多岐に渡る食物、レストラン、ファッショնや健康、庭づくりをテーマとして、個人の印象、個人の意見が主な情報源となる。誰が発言しているのか、誰が書いているのかが大きな魅力の要素となる。客観的であることを目指していた主力新聞やBBCにおいてすら主観的、印象的部分が強調されるようになる。その側面はまさにギルやクリストフが得意とする部分である。

ある記事を読み始めるという作業は中身を見ずに商品を買うという行為である。しかしここにブランド名のようなギルやクリストフの署名があるとき、人々はその中身が自分の期待するものか否かを既に知っているのである。それだけでもう読まないという決定をする人もいるだろう。書く側からいえば、自分の記事を読ませ続けるということは、スタイルを変えず、しかもより個性を強烈に、彼らの場合ならよりセンセーショナルに痛烈なものとして人を驚かせ続けなければならない。記事は既に商品なのである。書かれるものは基本的テーマのヴァリエーションとなる。この形に人気が集まる間生産者側は再生産を繰り返して市場に出すこととなる。

---

(73) Gill. *op. cit.*, p.79.

サンデー・タイムスは今収入を大きく広告に依存する新聞であると言われる<sup>(74)</sup>。新しい変化はマードック自身が強力に推し進めて来たものと同質で、彼にとっては実に魅力的なものであった。高級レストラン、ファッショニ、旅行などの広告は高収入を生むが、その為には読者層を高級品を購入出来る層に絞っていく必要がある。新聞自体をその層にとって魅力的なものとする工夫が紙面上でなされねばならない。サンデー・タイムスはそれにも成功したのである。

## ii) 新しいステレオタイプや神話の創造

メディアで完璧に新しいステレオタイプというのが創られることは稀である。読者、視聴者は着地点を必要とする。ある国について書かれる記事や作られる番組は読者、視聴者の既に持っているステレオタイプとの接点をつくり無事に受け手に着地する。その上でステレオタイプや神話の逆転を試みることがある。自分の既に持っているステレオタイプをそのまま確認して安心する純粋な娯楽趣味の読者は多いが、ステレオタイプや神話の逆転を「自分の新しい視野が開けた」として歓迎する時もある。特に外国の肯定的なイメージを破壊する場合、例えば日本のバブル期の「日本経済の成功」「日本人の勤労意欲」などの神話に人々が飽きてきた頃に多くこの逆転が見られた。同じものを異なる価値観で眺めるので、「調和」は「個性のなさ」「妥協」に転換していく。特にインテリ層は単純に既製のステレオタイプを信じ込んでいたことに内心忸怩たる思いがあるので、「勇敢にもステレオタイプを壊した」記事や番組を歓迎する。常日頃から自負する「批判精神」と呼応するからでもある。ジョン・スノウの日本の不況の惨めさを並べたテレビ番組“Snow in Japan”を英國の大學生関係の人たちが非常に評価するのを間近に見て驚いた経験もある。「今までと違う日本が描かれたから」と言うが、既にあったステレオタイプの反転であり、ある意味では再生産であり、また英國自体が変化すれば再び逆転させて新鮮さを狙うといったプロセスの一つに過ぎない。日本不況の報道は各国で過度なものだったようで、カナダから訪れた友人は東京を見まわして「でも誰もボロボロの洋服を着ていないわね」と驚いていた。

文学批評の分野で同じような、と言っても結果としては逆行する現象が起きてい

---

(74) Thomas, *op. cit.*

ることを問題にした論文がある。コマーシャリズムの中で大成長し大躍進したツーリズム（旅行業関係）とそこに使われる「売らんかな」のステレオタイプ（魅力あるエキゾチックな他者）の世界を否定し、それを逆転させた形で他国を描く「旅行記」や小説を、これこそが真実の世界の描写だ、と過剰に評価する傾向である。文学批評を学ぶ者、批評家や学生に見られるこの傾向を問題視してメリ・ルイーズ・プラット教授が書評の形で TLS (Times Literary Supplement) に載せ、作品を厳しく批判し、この現象を憂えている<sup>(75)</sup>。最近書かれた旅行記を大學の文学批評のクラスで教材として使った経験から筆者は語る。第3世界の都市を白人作家が自分の印象から描く旅行記がいかに画一的であるか、しかし学生達はこれこそが正しくその姿の真実を伝えているものだとして絶賛する。大衆向けのツーリズムが描いてみせる空想交じりの宣伝物から遠ければ遠い程、その旅行記は正直で生き生きとした鋭い目を持つ作家の作品である、と評価する傾向が強いことを教授は指摘する。本物の作家は魅惑的な植民地的ステレオタイプは一切否定して「真実の、ということは惨めな、商品的価値の無い」第3世界を見せなくてはならない、と学生達は信じているのである。自分たちが育ってきた環境である「ツーリズムが市場に売り込んだ第3世界の商品的価値の高い描写」を、真剣に文学を志す者としては強く否定する、という姿勢なのである。これが彼らの新しいイデオロギーである。自分たちが信ずる「第3世界の真実の姿」は殺伐とした惨めな世界を描き出す作家のものと一致するので、そういう作品のみを評価することとなるのである。作品に本当の文学的価値がなくとも、そこで満足すれば「素晴らしい作品」と思い込むのである。無意識の作業であろうが、作家、批評家、学生がほぼ一体となってコマーシャリズムが作った、というか再生した植民地的「魅惑の他者」を逆転することに価値を見出しているのであるが、価値の無いものの逆転が真の価値の発見には至らない、ということの自覚がない。ギルの記事は極端に過ぎるが多分この流れの一つの新商品であって「見事に肯定的オリエンタリズムを破壊した」記事であり、「本物」の作家が書く旅行記の商業的パロディーであろうか。

---

(75) Pratt, Mary Louise. "From the Victoria Nyanza to the Sheraton San Salvador", TLS, On *Literature in the Modern World: Critical Essays and Documents*. Dennis Dennis Walder (ed.), Second Revised Edition, Oxford: OUP, 2004, pp.354–69.

### iii) 内向的視野

ファッションや食べ物、健康を中心としたテーマは自然に自分の生活、自分のまわりに目を向けさせる。冷戦後ハード・ニュースが減少した、ということは報道するその分野の材料が減ったということである。メディアがこの方向に動いたから、人々の関心が外に向かなくなつたというだけではなく、あらゆる場所で現実に人々が外国に興味を示さなくなつたからメディアがそれを反映し始めた、ということも言える。ここにメディアの一つの大きな問題があるとすれば、既にメディアは教育的立場は捨てて、読者、視聴者の好みに合わせ、相対的商品価値に的を絞ってきた、ということであろう。英国の新聞のタブロイド版とブロード・シート版の差はますます小さくなつてきていていると言われる。外国のことを報じてもそれを如何に読者の求める娯楽記事に仕上げるかが特集記事の中心になる。娯楽記事というのは読者を「真摯に考える」ことから解放して単に面白がらせ楽しませることに専念するのである。

先進国の特徴であろうが、人は世界に興味を示さなくなつた、ということがよく言われる。ジョン・スノウ（チャネル4の有名なプレゼンター）はデイリー・テレグラフのインタビューで日本のことこう言っている。「日本で何が起こっているかに关心を持つべきなのだが、実際に日本人について我々が知っていることなどあるのか？実は皆無なのだ」（1998/12）。スノウは2001年クリスマスに Japan Week と銘打って流したテレビ番組、日本の凋落を扱った “Snow in Japan” のレポーターである。番組に彼自身の確かな見解が入っていたとは思われない。先のインタビュー内容を伝える *Reporting Japan* はこう続ける。

我々は日本の事は何も知らない。だから実際にはニュースは私たち読み手に直接関係することになつてしまうのです。どんなものを私たちは見たいのか、読みたいのか、聞きたいのか、その内容はどんなものが良いのか。私たちはその発信地がどこであれ奇怪で異様なものに惹かれます。なぜなら人間は皆、変わった物語が好きだからです。同時に自分達にとって現実の意味を持つものにも惹かれます。ということは日本に関しては興味は二点に絞られて、一つは日本の不可思議な面、風変わりな技術への嗜好、そして説明不可能な儀式やファッション、もう一つは私たち自身の生活の上

にインパクトを持つ日本です<sup>(76)</sup>。

大學のジャーナリズム学部の教師たちによって書かれたレポートであるが、日本を知らないのは当然と書き、だからもっと知るべきだとは主張しないのが今の英國の現実である。

一方アメリカも同じ状態にある、とジパングは書く。「アメリカのジャーナリズムの抱える問題の一つはアメリカ人が外国のニュースにますます興味を持たなくなつたことで、読者の興味を掘るためにメディアはセンセーショナルな外国のストーリーを作り上げざるを得ない」<sup>(77)</sup>。ハルートゥニアン氏はより辛辣である。「アメリカの人々は自ら進んで白痴化している。これは単に字が読めるのかといった問題ではない。ごく直接的な娯楽以外のものに対する無関心、他の文化について語ったり学んだりする努力に対する無関心の問題」だという<sup>(78)</sup>。日本も同様である。自分のまわりのもの以外に興味を示さない。この状況の中で特集記事の内容は日本のみならずどの国を材料としたものもカリカチャーであり、常軌を逸したものを描くこととなる。ロシアならマフィア、ウォッカを飲む夫、出稼ぎ売春婦などが取り扱われる<sup>(79)</sup>。この流れは明らかに時代に逆行している、と大竹秀子氏は警告する。「人、物、金、情報の国境を超えた行き来が激しくなる未来に向けて心あるジャーナリストが目指すことはただ一つ、それは表面的には明らかに自分たちとは違う異文化を尊重し理解する糸口となる情報を提供すること」と主張する。

## V. 日本蔑視記事を生む背景

### 1. 新聞社機構上の問題

海外報道のスペースが新聞紙面上で縮小されてきていることは述べた。このスペースを奪い合って各部門の編集者達が競い合っている。この競争に勝つ為には外国駐在記者、特派員から「望ましい」記事を送らせることが第一条件である。元ワシントン・ポスト極東総局長（1990－95）のトム・リード氏は当時振り返って次のよ

(76) Reporting Japan, *op. cit.*, p.29. (引用部分近藤訳)

(77) 『笑われる日本人』, p.97.

(78) Harootunian, Harry. 「影が薄い国」, 『笑われる日本人』 p.97.

(79) Gluck, *op. cit.*, p.85.

うに語る。「日本について沢山書いた…皆ワシントン・ポストの第一面に載った。ということは編集長が気に入ってくれた、ということです…しかし新聞の外信部の編集者は本国において、日本の理解度も低い。彼は何も知らない。彼が知っているのはアメリカが何を求めていたかである。」<sup>(80)</sup> 編集長はお決まりの日本イメージの方が安心で、日本を異様だとする否定的、蔑視的記事が読者にアピールすると思っているし<sup>(81)</sup>、読者は自分の頭の中にある日本やアジアに合うものを読みたがることを知っている。クリシェに合うものを欲しがる本国からのプレッシャーがかかる。この中で記者も本国の方ばかり向いている。編集者の思っている日本に合わせわけそうな日本社会の一側面を大袈裟に書くのが楽なやり方となる<sup>(82)</sup>。1991年のEast-West-Center「ニュース報道調査」—アメリカ人及び日本人ジャーナリスト・インタビューの結果も「歪曲された報道は海外特派員からではなく、本国の編集局側によって引き起こされることが多い」と出ている。しかし編集者は署名入りという記者にとっての利点を盾に取ってか、自分宛に送られる批判の手紙もしばしば無視したり、「では記者に伝えておきましょう、記者の意図はこうなのでしょうが」といった第3者的擁護をするのみである。ハルートウニアン氏はこれを批判する、「記者はその新聞社を代表していて、その新聞の見解とその編集の権力を体現しているのだ。その記者が書かなければ他の記者が同じように書く。記者の書いたものの責任は新聞社にあるのだ。」

アメリカの報道機関が特派員に何を望むかにも問題があるようと思われる。まず専門家ではないジャーナリストが求められる。その国についての経験や専門知識よりも「新鮮な目」が必要、取材、執筆能力が知識不足を補う、と考えられての人選であるが、ここから生まれる危険性をチェックする機関はない。専門家が知りすぎてもう面白いとは思わなくなっているようなことも材料にして欲しいという姿勢である。

日本バブル崩壊後関心は中国にシフトしたこともあり、日本に送られる特派員の頭数、質にも問題があると指摘する人もある。質の問題はこれだけではない。海外

(80) Reid, Tom. 「どうして客観的になれます？日本人が好きなんですよ」『笑われる日本人』p.59.

(81) Mayes, Tessa and Rowing, Megan. *op. cit.*, p.85.

(82) Ford, Jocelyn. 『笑われる日本人』p.76.

に出る時ヨーロッパやアジアからの記者と較べアメリカの特派員がいかに準備不足かが大きな問題である、とノーマ・フィールド氏は言う<sup>(85)</sup>。リード氏は自分が日本特派員であった時の経験を語る中で「NYT の記者は日本に数年滞在しても日本の朝食を見たこともない。日本人を誰も知らないし友達も一人もいない。私達一家には日本中に家に泊めてくれる友人がいて自分は25年間日本語を勉強し話しが出来、手紙も読める。そうするとテレビを見たり人と話すとき大きな違いが出てくる。」<sup>(86)</sup>事実記者たちは驚くほど何も知らない、とグラッグ氏も言う<sup>(87)</sup>。アメリカは大国で人々は他所の国に目を向ける必要性を感じていない<sup>(88)</sup>。日本についての多くの記事を書いた NYT のクリストフも日本語能力にハンディキャップがあり「自分はどんな本を日本人が読んでいるかがわからない。週刊誌は読めない。テレビの人気番組も知らない。流行歌の歌詞も理解できない。一番問題となるのは社会問題や文化について書くとき」であるという<sup>(89)</sup>。そう言いながら 3 年に亘って日本を嘲笑するような記事を本国に送りつけたのだ。先のリード氏はワシントン・ポストでクリストフの上司であった。彼のマンガに関する記事“アムール”についてリード氏は言う。「マンガの記事は日本語が読めない記者達にとって非常に楽勝の記事なんですよ…しかしクリストフの記事は誤解を招く時代錯誤甚だしいものがある。」<sup>(90)</sup>ワシントン・ポスト極東総局で経済担当の記者であったメディア研究専門家石澤靖治氏は「メディアはその国の国力を背景にする。アメリカのメディアはアメリカという国を背景としている」として実状を説明し<sup>(91)</sup>、大竹氏は NYT のクリストフの記事を念頭におきながら「有力なジャーナリストはまかり間違うと国力を嵩に際限無く傲慢になれる存在であるらしい」と皮肉交じりに嘆き<sup>(92)</sup>、ハイン氏も記者傲慢説に賛

(83) Harootunian, *op. cit.*, p.96.

(84) Holley, David. 『笑われる日本人』 p.73.

(85) Field, Norma. 『笑われる日本人』 p.138.

(86) Reid, *op. cit.*, p.63.

(87) Gluck, *op. cit.*, p.84.

(88) Ford, *op. cit.*, p.76.

(89) Kristof, *op. cit.*, p.34.

(90) Reid, *op. cit.*, pp. 60–61.

(91) 石澤, 『笑われる日本人』 p.71.

(92) 大竹, *op. cit.*, p. 7.

同しながらも「単に記者の質かも知れませんね」と推測する<sup>(93)</sup>。ジパングのトシダ・ミツオは更に厳しい。「元々ジャーナリストなんてものは裏付けされた事実を忠実に伝えるという基本さえ守っていればいいのだが、それ以上に自ら重要な存在になりたがる記者ばかり多くて困る。過大評価甚だしい職業だと思う」と言い切る<sup>(94)</sup>。編集者にも記者にも各々のあり方にも問題がある、と言えそうだ。

## 2. エスニック・ジョークの伝統

かなり長い年月外国で暮らしたが慣れないもの、楽しめないものがある。それは所謂エスニック・ジョーク (ethnic joke) である。英国人はアイルランド人やウェールズに住む人の、フランス人はベルギー人の、アメリカ人はポーランド移民の、といった他国、他民族に関するジョークが山のようにある。隣接した相手国をある時期権力を持っていた側が侮る。相手はバカだとかケチだといったジョークが多い。「〇〇人が屈んで靴の紐を結んでいて苦しそうだから足を乗せる台を持っていってやったら、別の方の足を台に乗せて、よろよろしながら地面に置いた足の靴紐を結ぶんだ」といった話からレベルは様々である。勿論仲間内でしか出ない話だから皆でゲラゲラと笑う。アメリカにも多くある。筑紫哲也氏は論文の中で興味深い解説をしている。

例えその時気分が悪くても “I'm fine” といったポジティブな言葉が常用句であり、明るいことが価値とされる社会がなぜ作られたのか。それはアメリカが他民族、他人種の多元的・複合的な社会であることと無関係ではないだろう。均質的（ホモジェニアス）で以心伝心が通用する社会とちがって異なる背景を持った人々が共存していくためには互いに悪意の不在を示し合う様様な工夫が必要である。その代償作用のような形でアメリカに豊富に存在しているものがある。メディアの表面にはほとんど浮上してこないが地下水脈のように流れ続けているエスニック・ジョークはその例である。それは多元的社会に生き続ける人たちのストレスを癒す“ガス抜き”的な役割を果たしており表出すればそこに籠められた偏見が非難されるものの死

(93) Hein, *op. cit.*, p.121.

(94) Toshida, Mitsuo. 『笑われる日本人』 p.30.

に絶える事はない<sup>(95)</sup>。

ヨーロッパでは国と国とが隣接する。一国の中で幾つかの民族や言語が同居している国もある。英国はかつて多くの植民地を世界中に持ち、現在の英国も北アイルランドがあり、本島にもスコットランド、イングランド、ウェールズがあつての連合王国である。階級社会の名残りを反映してのジョークもある。そして現在ではかつての植民地から流れ込んだ多くの民族、人種が英国に暮す。暮すだけではない、英国人なのである。ジャマイカ諸島などからの黒人、パキスタン、インドから、また香港からの移民もいる。そうすると宗教も様々でイスラム教徒も多い。恐らく英国でも「死に絶える事の無いエスニック・ジョークが地下水脈のように流れ続いている」のであろう。英国政府も民間も努力はしているがニュースになって表に出る人種差別問題もある。2003年11月には警官候補生の間でパキスタン系の候補生への差別発言があり5人の警官が辞任。北ウェールズの警官はシーツでクー・クラックス・クラン（K.K.K.）の格好をして驚かしながら「パキス（パキスタン人への侮蔑語）は英国生まれでも、どこまでもパキスさ」といった発言をした。BBCの記者が訓練校に侵入、隠し撮りしてニュースで報道した<sup>(96)</sup>。悪質なエスニック・ジョークの類もこのような形で水面に現れることも少なくはない。警察もこれを重要視して対応し改善しようとしているということは「ポリティカル・コレクトネス（political correctness）」の観念が社会に浸透してきている証拠である。かつてマイノリティーだった移民達も今や政治的に無視できない存在である。彼らは多くの票を持っていて。国内ではすぐに政治的問題となりかねないジョークはメディアも危険を感じて避ける。心には思っていても決して口には出してはならぬという状態から、真にそういう意識は持たぬという状態となる迄にはまだ長い時間がかかるのだろうし、それが可能かどうかわからぬ。その間その抑圧された感情はどういう「ガス抜き」をしているのであろうか。

英国のテレビで大変人気がある番組に「Euro Trash（欧洲連合のゴミ）」と「Banzai（バンザイ）」<sup>(97)</sup>がある。両方とも軽薄でその不快さが受けるのか大人気番

(95) 筑紫哲也「他者の目をどうとらえるか」『笑われる日本人』p.69.

(96) BBC 2003/11/9. [http://news.bbc.co.uk/1/hi/talking\\_point/3205253.stm](http://news.bbc.co.uk/1/hi/talking_point/3205253.stm)

(97) [http://www.channel4.com/entertainment/tv/microsites/B/banzai\\_new/](http://www.channel4.com/entertainment/tv/microsites/B/banzai_new/)

組である。「ユーロ・トラッシュ」は強いフランスなまりで英語を話す（演技と思うが）フランス人、「バンザイ」は日本のアクセントを誇張した日本人と見られる背が低くずんぐりして眼鏡をかけたがに股の東洋系男性と目の釣りあがった女性とが司会者である。英国人がやつたのであれば当然問題となるカソリックの聖体拝領の儀式をテーマにして、「カーニバリズム（人肉嗜食）」の伝統だなどといって笑い「カケ事」の材料とする。ここには書けない程低級であるが、この下品な番組は日本が英國に持ち込んだと信じている人達も多い。私も弁護士の友人から「恥ずかしくはないの？あなたの国ではあれが普通なの？」と聞かれて驚いた。人気番組上位に入り「バンザイ」は何年も続いた。「ユーロ・トラッシュ」はEU加盟の国々を回りその国に対して英国人が持つステレオタイプの姿を映し出す。例えば私の見た「ギリシャ」の番組は月桂樹を頭につけた裸に近い格好でリュートのような楽器をかき鳴らして男性たちが同性愛的振る舞いをし、そこに妙なナレーションが入る、といった趣向であった。

今年EUの加盟国が大巾に増えた欧州連合はヨーロッパの一体感をますます強固なものにしたように見える。しかし身内になればエスニック・ジョークが消えるということでもなさそうで、むしろ口に出しにくい分だけジョークの実際の活躍の場は増えるのだろうか。メディアがこのような形で発散させてくれて国内は安泰、だから「バンザイ」のような番組が生き続けるのだろうか。

### 3. なぜ日本か？

なぜ日本がギルの記事のように、またJapan Weekのテレビ番組のような形で描写されるのであろうか、という問い合わせへの答えはここにきてかなり明確に見えてきたと思う。勿論日本が並外れて多く登場する訳ではない。しかし登場したときには、ギルの記事のように徹底した嘲りの対象となることが多かった。これには幾つかの理由が挙げられると思うのである。私の問い合わせに実にユーモアたっぷりで的確な答えを送ってくれたデューク・マスケル氏の論文<sup>(98)</sup>の一部をまず引用してみる。

なぜ日本か？ギルは世界中のどの国でもテーマに選ぶことが出来るのだから、なぜ例えばウズベキスタンやペルーを選ばないのか？

(98) Maskel Duke, 未出版論文。（引用部分近藤訳）

この話に入る前に日本の皆さんに説明しておくことがあります。現代の英國のジャーナリズムに求められていることが二つある。それは互いに矛盾する二つののですが、一つは政治的礼儀正しさ (political correctness) を守って人に不快な思いをさせてはならない、ということであり、2つ目は新聞を出来るだけ多く売らなければならない、という2点です。売る為の最も手早い方法は読者にショックを与えることであり、それは政治的には正しくないことを書くことです。また当然これは「安全」な形でやらなければなりません。

今の英国はアフリカ、カリビアン、インド、パキスタンからの大量の少数民族を抱えており、民族間の憎悪をかきたてるようなことを言うことを律する法律を持っていて、黒や褐色の肌色の人、シーク、イスラム、ヒンズー教の人達に関してギルが“Mad in Japan”で書いたようなことを高級紙に書くことなどはまず考えられないことです。同じような理由でEUの仲間や将来仲間となりそうな国についても書けない。「振り返って言える事であるがドレスデン（ドイツの町）を火の海にして焼き尽くしたのは良いことだった」など誰が言ったとしても大問題となり、許されることではないでしょう。

そうであれば世界中のかなり多くの人達が動物の例でいえば、パンダや鯨などのような「保護される種」なのです。残念ながら日本はこのグループに入らない。またウズベキスタンやペルーは、と言えば英国人が全く興味や関心を持たない国です。日本との間には第2次世界大戦があり、今では英國に日本の自動車工場もあって英國経済にとって重要な国でもあります。だからお分かりでしょう一何でも政治的に「安心」して言って、しかも英國人にとって興味もある、という二つの条件をクリアする日本は今英國の新聞にとって「かっこうの餌食」なのです。英國はだからあなた方に「興味」を持ち続けるでしょう。それがお困りならば日本人も「保護される種」の仲間入りをすることです。どうやって？— 群れをなして英國に入ってきて移民として住み着くことです。

マスカル氏の纏めにはっきりとは出なかった点に仮説を交えて付け加えておく。

- 1) 日本は地理的に遠い。新聞が読まれるチャンスも少なかろうし抗議もしない国である。言語もかけ離れている。その安心感がある。
- 2) 一旦開き直れば、「英國は日本に野蛮というレッテルを貼り、嘲る権利がある」と英國側は感じている。それは日本が第二次世界大戦の敵国であり、日本は敗戦国であり、英國人捕虜を残酷に扱い、その補償も十分にせず謝罪をしない国と思っているからである。戦争と同じメタフォーを使って日本は VJ Day ごとに描写される。記念日はこのイメージに毎年新しいエネルギーを注ぎ込む日でもある。ギルの記事の様々な言葉や表現は英國人にとっては決して初めて見たり聞いたりするものではない。驚いたり強烈なショックを受けるのは（幸い）遠くにいて今迄それを目につくことなく暮せたが偶然それを読むはめになった日本人である。
- 3) 多民族国家が思いを一つにして纏まるのは外に敵を持つ時、敵とまでいかなくとも嘲りの対象を外国に絞る時である。このような安易な解決策をそう簡単に英國は手放そうとはしないであろう。
- 4) 西洋と自国の優越性を全く疑うことなしに20世紀まで辿り着いた英國は日本の経済成長、進出した日本企業、バブル期の繁栄を見て面白くはない。進出した日本の工場内のハイラキーは日本人を頂点に、英國人はその下で労働者として働く。歴史上ほぼ初めてのことである。心理的インパクトは大きい。なんとかして日本の後進性を探したい。日本をやっつけることが大衆の娯楽となることは大いに理解できる。後進性はどうやって探すか？上野千鶴子氏は「日米貿易戦争や経済摩擦などで日本がアメリカに優位に立った時日本叩きの切り札がどんどん無くなつた。だから女（女性は日本ではひどく扱われている、といった後進性）がジャパン・バッシングの次の標的になるだらうことはもう10年ぐらい前から予測できた」と書いている<sup>(99)</sup>。
- 5) マスケル氏の引用にもあったように日本からの移民は英國には無いに等しい。大使館員、日系企業駐在員、学者、学生はいるが、グループとしての政治的力は持たない。ポリティカル・コレクトネスを適用すべき相手ではない。警戒す

---

(99) 上野, *op. cit.*, p.78.

べき何らの過度な振る舞いや危険性を持たぬ大人しい相手で、抗議行動などしそうもない。「冗談ですよ」と言わわれれば「それは冗談だらうなあ」と安心したり、冗談を理解できなかった自分を恥じる程の大人しさである。

- 6) 日本報道は「政治的礼儀正しさ」によって抑制され燻っているエスニック・ジョーカーの黒い塊を発散させる一つの装置として英國社会で役立っている。
- 7) 「ユーロ・トラッシュ」はマスキル氏が「保護される種」と位置づけたEUを扱っている。わざわざフランス人の司会者を使っているのは、英國をあまり前面に出さない工夫か。
- 8) 英国のマス・メディアは自国のロイヤル・ファミリーの私生活すら露骨に暴露する。日本に関する記事があの程度でも驚くことはない。

#### 4. 日本の側の問題点

歪んだ、また不愉快な日本報道の原因は外国の記者のみにあるのではなく、取材される日本の側にもある、と石澤氏は言う。それは日本人の不必要的英語コンプレックスの弊害である。細かいニュアンスまで表現出来なくても英語で喋ろうとし、英語でインタビューを受ける。不用意に相槌をうつたりして記者側の思い通りの記事になったりもする。取材される日本人の無防備さが問題である。また欧米の新聞は基本的になんでも批判的な見方をする方針である<sup>(100)</sup>。記事は書き手の主観を基礎にして組み立てられるが、そこに客觀性を与える為に取材し、インタビューなどで様々な人の言葉を証明として加えていくが、この客觀性は石澤氏に言わせると、かなり「くせ者」であって「こういう発言が欲しい」というところを空けて待っている。その主觀的「物語」に適合するサンプルを選び、自分の誘導落ちで都合の良いコメントを取る。「そういった技法の餌食になるのはこうした背景に無防備な日本人が多いからである」と言う石澤氏<sup>(101)</sup>、そして「メディアは商業主義に従って動いていることを頭に入れておいた方が良い」と言う上野千鶴子氏の忠告は貴重である<sup>(102)</sup>。こうして、インタビューされた日本人すら望まなかつた記事が生産されて

(100) 鈴木陽子『笑われる日本人』p.75.

(101) 石澤、*op. cit.*, p.74.

(102) 上野、*op. cit.*, p.80.

いく。

## 5. 加担する学問

日本を対象とした（娯楽用）メディアはほぼ徹底して日本を異質の「他者」として作り上げていることをここまで見てきた。また「他者」とはサイードの言う「オリエンタリズム」のステレオタイプを総括する最も根源的イメージであることも先に述べた。世界の望ましい流れとしては、外国や外国人を自分達とは全く異なる不可解なものとして捉えるのではなく、如何にして距離を縮め理解に向けて努力するか、であろうと思う。多くの人は単純に学問はその方向を目指している筈だと過信している。学問の目的も様々であるから、「他者」のイメージが材料として使われる場合や研究の過程にこれが強調される事はあるだろう。しかし「他者を創り出すことに加担してきた」と内部から批判が上がっている学問の一例を挙げてみる。勿論この学問自体の存在価値や存在意義への批判ではなく、現在偏りを見せている内部の動向に対する批判であり、本質に立ち戻る為の改善に必要な、そして勇気のある提言である。

論文は日本民族学会の『民俗学研究』に掲載された川橋範子氏の「他者としての日本女性—欧米の水子供養言説批判」であり、特にここではフェミニスト民族誌を問題としている<sup>(103)</sup>。「文明化」された場所での「未開」の人々の展示が永続的な権力の不均衡をもたらす」とクリフォードは主張したが<sup>(104)</sup>、この「展示」の歴史は地域研究においては特にジェンダーの問題として提示されてきた。「地域研究」が大国アメリカの世界戦略に学問的基盤を与えてきた歴史を持つことを、市川浩史氏なども認めている<sup>(105)</sup>。この流れから研究は植民地的構造と深くかかわり、現在でも植民地主義的フェミニズムの表象が主流となっている、と川橋氏は観察する。近年日本の水子供養儀礼が研究テーマとなることが多いが、その多くが日本女性を胎児の祟りに怯える「異質の他者」として描き受動的犠牲者として捉える。このデータは未だに根強い「家父長制の偏在」の立証として使われ、かつての植民地的眼差

(103) 川橋範子「他者としての日本女性—欧米の水子供養言説批判」『民俗学研究』 Vol. 68, No. 3, 2003, pp.394–412.

(104) Cliford, James. 『ルーツ 20世紀後期の旅と翻訳』月曜社, 2002, p.225.

(105) 『季刊日本思想史』 61：3 – 5, 2002.

しである。「褐色の女性たちを、その国の男性から救い出す白人男性達」の姿が復活する。「日本女性は西洋をフェティッシュ化して白人男性との結婚を切望する」とする論文も出された<sup>(106)</sup>。ここで民族学フェミニストであるケルスキーが問題としているのは日本女性が日本社会の抑圧から逃れるために白人男性に近づいて性的欲望を満たす時、実はこの行為が白人男性のグローバルな霸権の維持に加担しているのだという「事実」である。フェミニストが悪の根源として問題とするのは「家父長制」であるが、論文は日本の女性は自覚もなくその共犯者となっている、と主張するのである。こうして水子供養も「避妊の決定権を女には渡さず、最終的には中絶に至り胎児の祟りに怯える女—「無感覺男と愚かな女」—のモチーフの一例として分析される。これがメディアに流れると「男がリードすべき、がサムライの原則」などという時代錯誤のコメントと共に水子供養は NYT の記事になるのである（シェリル・ウーダン “中絶を悼む日本の儀式” 1996/1/2付）。水子供養を「中絶問題からの回避を可能にする形」として肯定する側<sup>(107)</sup>、これを否定的に見る側、共にアメリカの中絶の肯定に絡めての大きな政治的アジェンダとなって、多くの研究者達の「研究」対象となっている。川橋氏は研究の多くがきちんとしたフィールド・ワークに基づいたものでなく、特定の政治的意図に基づいたナラティブの再生産に大きく加担していることを問題視する。センセーショナルな事例をあたかも普遍的なものとして扱う。インドにおける持参金殺人や女児の性器手術などのテーマへの固執は根強い。特に性がからんでくるような研究報告はそのまま「学問的裏付けもある事実」としてマス・メディアに流れる。「男性は暴力や逸脱に性的快楽を見出す…強制的性行為、妊娠につながることが予見される場合などの逸脱・侵犯(transgression)の要因が男性の欲望にとって重要」だから日本のような受動の女性の多い社会では中絶が多く、女性は祟りで水子供養に走る、という論点から書かれたハーディカーの『日本の祟る胎児の商品化』はアメリカにおける優れた日本文化研究に与えられる有沢広己記念賞を受賞し、ハーディカー自身はこの本こそが中絶とジェンダーの葛藤についてのフェミニスト的研究であると自負している。これに対しても賛否両論あるが、ハーディカーを代表とするグループがこういった研究

(106) Kelsky, Karen. *Women on the Verge*, Duke UP, 2002.

(107) La Fleur, William. *Liquid Life: And Buddhism in Abortion*, Princeton UP, 1992.

の主流にいて西洋の普遍的人権と普遍的女性の経験に基づくフェミニズムの優位性を疑うことしない<sup>(108)</sup>。こういった学者の多くは「植民地的状態」に強く反対しながら、その状態を無くすることを役割の一つと考えるが故に「植民地的現状」を探して資料とし論ずる。なぜか？「そういった状態が存在する」ことを立証し「それを根絶することの意義」を表明し、遅れた「他者」を助け導くことが重要であると認識しているからである。しかし「その状態」に対しての理解の欠如、特殊なものを普遍化してしまう傾向が問題である。「根絶すべきもの」は植民地的ステレオタイプの形を取っている、と予想されるので、テーマを探す時すでにそれに合致しそうなものを探し、合致点を強調したり、理解の欠如から内部の人間にはこじつけと見えるような分析をする。より事情がわかっている筈の現地の学者がこの分析を批判すると、それこそが家父長制にからめとられた女性達の後進性の証と解釈されて多くの場合異議申立ては却下される、という状態であるという<sup>(109)</sup>。川橋氏は「ハイディカー氏らの特殊化された政治的意図に基づくフェミニズムが日本の宗教と女性に関する新たなオリエンタリズム的表象を生み出してしまったことを問題化」している<sup>(110)</sup>。こういった問題は民族学にとどまらない。宗教研究、地域研究でも同じような問題が一部起きているという。

また日本人や外国人による「日本人論」も日本は違うということを強調して、日本を完全に異質に見せる結果となる<sup>(111)</sup>。外国からの特派員が日本は特別な社会だ、と思い込むのは「日本人が創った日本人論」の影響もあって様々な問題を現代の脱工業化社会に共通する問題と考えるのではなく文化的な違いにしてしまい、そこに答えを見つけようとする結果となるのである<sup>(112)</sup>。

学問が健全なメディアを生む動力とはならない、という見方は悲観的に過ぎるだろう。決してそうあって欲しくはない。他国にどういう眼差しを向けるかということは既存の学問の一分野でカバー出来る問題ではない。これに向けての研究と教育が必要だ、という認識が様々な分野で生まれて、今まで繋がりのなかった領域が重

(108) 川橋, *op. cit.*, p.403.

(109) *loc. cit.*

(110) *ibid.*, p.405.

(111) Gluck, *op. cit.*, p.86.

(112) Field, *op. cit.*, p.138.

なり合って新しい知が誕生し活躍し始めること、これは政策情報学部に課せられた一つの可能性でもあると信じて、この拙い小さなりサーチを始めた。輪を広げていきたい。

## VI. 物語る側の鏡像

日本報道、日本関連の番組、作品には当然日本が登場する。多くの場合主役と見える。しかしこれ等の実際のテーマは日本なのか、それとも作る側が主要ポイントなのであろうか。*Last Samurai*（ラスト・サムライ）が日本で公開されるのを目前に「日本は正しく理解され表現されているでしょうか」という問い合わせをうけて、生井秀彦共立女子大教授が答えた記事がある。要約すると、

異文化を描く物語は何よりも描く側の自画像だ。*Dance with Wolves*もそうだったし、この場合も例外ではない。多文化主義時代におけるアメリカ大衆文化の鏡像（ただし歪んだ鏡の）なのだ。90年公開の *Wolves* がリベラルからのアメリカ体制批判だったのに対して03年の *Samurai* は右寄りの反体制志向になっている。「偉大な祖国アメリカを返せ」と叫ぶ草の根の保守派に通底する。その幻滅をすくいとる装置としての異文化の「ブシドウ」を持ってきたところが興味深いのだ<sup>(113)</sup>。

決して基本的に新しい主張ではないが、真理をついた実に興味深い分析である。サイードの主張も基本的にはこれである。しかしサイードが対象としたステレオタイプ創造の源であった植民地時代は既に去って、今私達は世界中の情報が飛び交う時代に生きていて、条件反射のように「伝えられるものには客觀性があるのだ」と思い込みがちである。その落とし穴にはまらないように心するべきなのである。

先に見てきた「書かれた記事と発表の時期」との強い関連性は、生井氏の分析の裏付けともなるだろう。この論文の題名を「歪んだ鏡に写る日本」とした由来は偶然とは言え同じ発想から生まれたものである。見る側の目、すなわち鏡が歪んでいるのである。自然に歪んでいる場合もあれば、故意に歪める場合もある。メディアでは後者の方が多いのであろう。メディアは効果を狙って計算する。歴史の分岐点

(113) 「文化総合」、朝日新聞、12版、2003/12/23、p.26.

になるかもしれない「アメリカ：6月30日」を前にアメリカを訪れた岡部日経論説主幹の記事も興味深い。「久々に訪れたヤンキー・スタジアムではことさらに“アメリカ”が強調された。レーガン元大統領の国葬を受けて，“世界の指導者”“偉大なコミュニケーター”に黙祷がささげられ、亡くなったレイ・チャールスがアメリカの心を歌う映像が流された。それは「偉大なる社会」が揺れ始めた裏返しなのかかもしれない。」<sup>(114)</sup>

## 1. 問題化の是非をめぐって

このメカニズムを確認すれば、これは日本の問題ではないのだから、ギルやクリストフ記事やそれが書かれる現状は放置しておいても良いのだとする議論も成り立つ。しかしここでは「記事のポイントは書く側である。アメリカ自身（また英国など）だ」と言っているのであって、それを放置すべきか否かはまた別の問題である。日本にとって全く害がなければ放置しても良いだろう。今実際に日本は、害があるか否かには関知せずにこれを放置しているのである。JAPなどという呼び名が入っていたり、あまりにひどい事実無根があれば日本大使館も抗議はするが、日本に多くは届けられることのない記事、日本では見られないテレビ番組、英語だけでの発表であるから日本人は殆どこういうものの存在すら知らない。知らないから怒る機会もないし、聞いても直接に感じていないから大らかである。「まあいいじゃないの」とか「そう神経質になりなさんな」という反応が多いのである。人は寛大さ故に許したり忘れたりもする。しかし忘れることの方が楽だから忘れることもある。放置するのが俐巧だと大人なのだ、ではなく「放置することこそが正しいのだ、日本の為に良いのだ」という確信が持てるまで、今一度「この現状はなぜ問題か」という方向で考えてみよう。

深刻な政治的な問題で誤った情報が流されている場合はともかく、娯楽用は無視すれば良い、という意見もある。石澤氏は日本に関する報道の重要性の認識が日本に大きく欠如していることは実は大きな問題である、と主張する<sup>(115)</sup>。バレス氏は

(114) 「核心」、日本経済新聞、2004/6/21.

(115) 石澤、「はじめに」、『日本はどう報じられているか』 pp. 6 - 10.

「これは日米関係にとっても深刻な意味合いを持っている。日米関係は往々にしてアメリカ大衆の日本觀が作り上げる政治的ムードによって決まるから」と言う<sup>(116)</sup>。特に日米間に貿易摩擦問題があったときはひどかった。先にふれた宮沢首相の発言を誤訳してアメリカ中のトップ・ニュースとし、ホンダの車をハンマーで壊す「愛国者」達の写真が出て「アメリカ製品を買おう」の運動が広がり、世論調査にも反日感情が強くあらわれた。影響力を持つ報道の中に日本人に対して偏見を持っていると思われるものが嫌になる位沢山あった、とバレス氏は回想して、「日米関係を良好に保つためには偏見に満ちた報道はきちんと問題にした方がいい」と助言する。メディアの持つ破壊的側面の認識が重要である。しかしそれは政治的、経済的な問題の時であり、娯楽は単なる娯楽で無害、と思う人もあるだろう。しかし実は他国の、特に否定的ステレオタイプは子供の頃に強い印象とインパクトで植え付けられるものが多い。

マリオ・マッケナ氏は北アイルランドのベルファストで育った子供時代の思い出を語る。

子供用のマンガ本は英国人と日本人の戦争がテーマで、しみ一つない制服、完璧なアクセントで話す典型的な英国人将校と出っ歯で瘦せて細い目、変な英語を話す日本人が登場し日本人は剣をふりかざして「バンザイ」と叫ぶが、最後にはユニオン・ジャック・ジャクソン（ユニオン・ジャックは英國国旗）といった名前の英國軍人に殺される。NIPS、JAPSと呼ばれる黄色人種の日本人は奇妙な呼びを上げて死ぬのである。白黒マンガで毎週毎週届けられるのだが毎回同じような人物達が同じ形で死ぬ。永遠に繰り返されるステレオタイプである。そういう「外国」が私達には身近なものとなった。なぜならそういったステレオタイプが繰り返し使われるからだ。少年達は皆これが本当で、その外国の眞の姿だと信じ込んでいた。こういった子供の頃にマンガを通して植えつけられたイメージは後大人になって、どういった考え方を持ち、どういう態度を取るかなどの心のあり方を決定づけるのに大きな影響を持つ。こういったイメージが英國人の意識の中にセメントのように固まっている。VJ記念日の前から書店の本棚には捕

---

(116) Burress, *op. cit.*, p.46.

虜収容所などでの残酷な日本人を題材とした本が高く積まれる。つい最近の日本降伏50周年記念日にも英國の新聞は「不可解な決して謝るということを知らない東洋」を書きたてた。マンガから映画へ、本へと姿は変わつても、内容は皆同じ、日本人は50年前の「奇妙な」外国人である。学校の教科書も間違いだらけである<sup>(117)</sup>。

子供は自分が子供の頃から持っているイメージを再確認しつつ成長する。いつからかそれは自分的一部となる。毎年戦争記念日に出会う大量のイメージがある。貿易摩擦が起こればまた同じイメージが使われ「ずるい悪者像」はいつまでも生き続けるのである。娯楽が娯楽で終わる訳ではない。「メディアが繰り返し描くステレオタイプの大半はこうして温存され、世界中をあつという間に駆け巡りいたるところで待ち構えている自民族中心主義の肥やしにやすやすとなるのだ」とグラック氏は警告する<sup>(118)</sup>。メディアは個人の意見を超えた社会の価値や見方についての重要な情報源となる。人々が一般的に何を共有しているかを表現し伝達する手段としてのメディアの役割は実に大きい。「社会的に共有されていると思われている認識、規範、価値は人々の行動やその結果としての社会現象に大きな影響をあたえる」と坂本佳鶴恵氏は指摘する<sup>(119)</sup>。

より大きな規模で眺めるとマス・メディアの持つ伝達力は世界を巻き込む。特にマス・メディアとしてのテレビや携帯電話は時間や空間、国境を超えてほぼ瞬時にイメージを撒き散らす。テレビの持つ影響力は巨大であり、「情報の力が冷戦を終わらせた」とさえ言われている<sup>(120)</sup>。衛星放送を見て東ヨーロッパの人々は瞬時に動き始め、ベルリンの壁は壊されチャウシェスク政権は崩れた。

ヨーロッパ人が最も信頼を寄せている組織は何か、という問いに64%がテレビ、ラジオと答えており（自国の政府に対しては23%しかないのだが）、「自由で客観的な報道」を信頼して、予測出来ない展開と早さで歴史が動き冷戦が終わった様をドキュメンタリーは追った。現在情報の主力を占めるのはアメリカ軍事衛星である。

(117) McKenna, Mario. <http://iteslj.org/Articles/McKenna-stereotypes.html> (引用部分  
近藤訳)

(118) Gluck, op. cit., p.90.

(119) 坂本佳鶴恵『家族イメージの誕生』新曜社, 1997, p.71.

(120) ドキュメンタリー「衛星放送が伝えた変革」NHK衛星第1, 2004/5/1, 7:40-.

欧州はガリレオ計画という共同プロジェクトを進めてアメリカを牽制しようとしている。欧州のみならずこの計画には中国が2億、インドも3億出すという。情報が如何に重要な武器となるかを各国は認識しているのである。2004年5月の小泉、金正日会談には日本からの記者団も多数北朝鮮入りして携帯電話やITの活躍が見てとれたし、5月初めにはピョンヤン市内で携帯電話を使う人の姿も見られたという。しかし5月25日になって市民の携帯電話利用は全面的に禁止となり電話端末の回収が進められているという。独裁を維持するためには自由な情報の流れは一番恐いのである（2004/4/4、日経）。映像を通しての認識、理解は言語を超えたものであり言葉の限界に縛られないで、その意味解釈は普遍的で更に強烈である。

テレビやラジオと較べて新聞など「書かれた」情報はどうか。広範囲に住む人間をテレビのように一瞬にして受信者にすることは難しいが、「書かれたもの」はよく練られて真実味が高いと読者は考えがちである。この反応は世代によって異なるかも知れないが、画像や音声が一瞬で流れて消えて行く、という流動性を持っているのに対し、印刷されたものは手許に保存され得る物体として残っている、という体感がある。想像の世界の流動的ステレオタイプはそれ自体は抽象なので、あらゆる具体的現象に結び付きやすく再確認を行いながら生き続けるのである。メディアの影響力を軽視してはならない。

## 2. 変化をもたらすもの

### a) 真の国際化に向けて

国と国との間の理解はますます必要になってきている、とよく言われる。しかしこれが達成される方向に世界が動いているとは思えない。ますます逆行している感がある。西洋圏とイスラム圏、イスラエルとパレスチナ、ロシアとチェチェン、どこを眺めても深刻である。他国を嘲り笑って娯楽とする時間などない筈である。

これまで日本の立場を一方的にメディアの被害者として描く流れの中で書いてきた。しかし真剣に他国に関する知識を吸収して理解し、異なる文化を尊重する教育や環境は日本にもない。日常は娯楽を中心に流れている。今まで見てきたアメリカやヨーロッパのメディアで日本を対象にして起きていることとちょうど同じような

事が日本対他のアジアの国との間で起きているのではないか、とコロンビア大、近代日本史のグラック教授は憂慮する。「おそらくアジアについての日本の知識はアジアの日本に関してより劣る。アジアについての日本のおしゃべりはアメリカでの日本についての特集記事に似ている。アジアについてのステレオタイプを永続させ、日本とアジアとの間に距離を保ち続ける。日本のこのアジアに関する知識不足は欧米への過剰な関心以上に私は深刻だと思う。アメリカと日本、アジアと日本はともに時代錯誤的である。」<sup>(121)</sup>このうちの一方が存在するから他方の存在も許す、という姿勢からは何も生まれない。日本に可能なことはアジアに向ける視線を正しいフェーエアなものとすることであり、その姿勢からのみ欧米へも説得力のあるメッセージが送れるであろう。

同じことは欧米に向けても言いたい。国民を無知のままに放置すること、他国の搾取の上に自国の娯楽をまかなって、実のない優越感に浸ることが長く続ければ、かならずそのつけはその国にまわってくる。失うものは多い筈である。「長期的に見ればいわゆるジャンク・フードばかり食べ続けると同じ効果が国に現れてくるだろう」とベル教授は書く<sup>(122)</sup>。「他者」の異質性の強調は各国を地球規模でナショナリスチックにしていく、とグラック氏は警告する<sup>(123)</sup>。

英国の新聞の質が低下した、と感じる読者の新聞離れは大きい、とヘレン・トマス氏は報告する<sup>(124)</sup>。英国は日本のように家に新聞を毎日配達させる長期契約の読者は多くない。メディアに関して言うと英國の知的階層の人々はラジオを好む人が多い、という印象を持った。これに対して日本では情報源としての新聞の信頼度は高いことが新聞協会の意識調査でも見て取れる。新聞、ラジオ、雑誌、インターネットのメディアの内94.5%の人が新聞を読んでおり「情報源として」(58.2%)、「社会への影響力がある」(55.8%)などの14項目で1位を占め、広告に対する評価も「情報が信頼できる」(60.9%)として8項目で新聞が1位であった(2003/10調査、2004/5/11日経)。

日本の主要新聞の海外報道がおおむね正しい軌道にあることは英國に関する報道

(121) Gluck, *op. cit.*, pp.87–88.

(122) Bell, Michael, “Gill’s Article”, 未出版論文.

(123) Gluck, *op. cit.*, p.91.

(124) Thomas, *op. cit.*

の姿勢にも表れている。2002年9月30日—10月1日にかけて、日本で「Reporting the U. K: A Japanese Perspective of the U.K.」と題したシンポジアムが開かれ、資料として *An Unexpected Eden: Britain in the Japanese Press* が配布された。BBC 日本支局長の経歴を持ち現在は European Affairs, BBC World TV, Europe Direct 役職にあるウイリアム・ホーズレー氏によって書かれた30頁に亘る日本5大紙の英国報道の分析報告である。朝日、毎日、読売、産経、日経、東京新聞が2002年1月17日—7月31日までに載せた英国関連のすべての記事を扱い分析している。その全体数1,240、政治、経済、軍事、EU、社会、人種問題、芸術、スポーツなど様々な項目をカバーしている。報告書の題名が「期待もしなかったパラダイスのような英國像」とあり、そこからもわかるように日本の英國報道は、英國の日本報道と較べてはるかに肯定的であり、真面目であることがわかる。ホーズレー氏はその理由として日本自体に政治的、経済的に深刻な問題が多くあり、それを改善する為のモデルとして英國が使われている、としている。英國の自由な精神、健全な経済、移民に関する進んだ法律、政治家と官僚との癒着を生まぬ制度など、英國から日本が学ぶべきことが多いことを指摘し、特集記事に関しては日英共にくだけた、風変わりなものも扱っていて共通点があり、結論としては「互いに冗談を分かち合うことの出来る二国は良い関係なのだ」としているが、客観的に二国の報道ぶりを見ていると日本には英國についての“Mad in Japan”のような記事は見当たらぬ。ホーズレー氏にはこのギルの記事に関する批評論文の執筆を依頼したが、同業のものに関しては書きにくいとの理由で辞退された。このレポートによると日本が英國から学ぼうとする姿勢は「学ぶべきものが英國にはあるから当然」としているが、仮に「英國側に日本から学ぶ姿勢が見られないのは当然」と考えているのであれば本論文が扱っている問題点の一端はここにあると思われる。このレポートと先に取り上げた英國による日本報道レポート、*Reporting Japan: From sun-rise to Sun-set, Japan in Britain's Newspapers: 1990–2000*とを具体的に比較してみると報道姿勢の差は歴然としているように思える。

#### b) 日本に求められるもの

世界が日本をどう認識するかはその殆どがメディアを使った間接的なコミュニケーション

ションに左右されている、と言ってよい。特に地理的にも精神的にもまた知的にも距離が遠い二国間では、マス・メディアの報道への依存度が高くなる。アメリカはメディアによる情報の動きとイメージ形成に果たすメディアの役割を重要課題の一つと捉えている、という。メディアによって創り上げられるイメージによって他国はアメリカを、アメリカ人を、認識することを知っているからである。石澤氏は「国際政治の中で戦略的な情報発信を行って望ましいイメージ形成を行うことは極めて重要な要素だ」と述べる<sup>(125)</sup>。アメリカは歴史的に振り返っても様々な場面でメディアを使って言論を開戦へと盛り上げたり、直接的プロパガンダ活動や武力行使も行ってきた。しかしそれより長期的戦略も常に持っていて留学生を多く受け入れたり文化を普及させたりという運動を通してアメリカとその価値観に親しんでもらうことの努力をしてきた。

日本も例えば欧米からももっと留学生を招く、日本を学んでくれる人をもっと優遇し、その数を増やすなどが重要な課題である。ニューヨーク大学東アジア研究科ディレクターであるハルートニアン教授はジパングに「影が薄い国日本—学者たちの努力は徒労に帰し、日本はいまだ遠い国」という論文をよせて、「なぜ日本はこんなに面白くないのか?」といぶかる。「地球規模の政治世界などの中にあって日本はほとんど目に見えない存在でいる。政治、論評を通して自分を表現しようとしている。世界での政治的役割からしり込みする…国家化された文化的自己表現の中に閉じ込められている—それが最も大きな問題なのだ」と言う<sup>(126)</sup>。日本について学び母国に日本を理解させる努力をしてきた人達からの様々な助言を吸い上げながら協力していく姿勢が必要であろう。日本のステレオタイプは昔からほとんど同じものが使われている状況にあるが、これを変形させる可能性は、ともかく日本との接触の機会を増やすことである、とグラック氏は言う<sup>(127)</sup>。充分な数の人々が日本を知ればそうやすやすと既製のイメージを受け入れなくなるからである。他の国々のマス・メディアとコミュニティーを作つて話し合う機会をつくる。共同制作を進める。市民レベル、学生レベルの交流も有効である。国際理解はマス・メディアだ

---

(125) 石澤, *op. cit.*, p.12.

(126) Harootunian, *op. cit.*, p.97.

(127) Gluck, *op. cit.*, p.90.

けに委ねているとなかなか進まないが、人的交流があると自然に進むものだ、とニーマン氏は語る<sup>(128)</sup>。特派員教育も重要である。日本にいる特派員に正しい日本の歴史、文化、言語をもっと教える。自国向きの彼らの視野をより国際的にする。書く側と書かれた側の両読者が公正だ、と認める記事を書く努力をしてもらうことをバレス氏は提案する<sup>(129)</sup>。しかし先に述べた通り記事の選択は本社にいる編集者が力を持つ。編集者の日本理解度も低く、経営陣は読者の好みにおもねる商業主義から編集者にプレッシャーをかける場合もある。特派員も困難な状況におかれていることは確かである。しかしこの状況のなかでも良心的記者はいる。フォード氏はその一人である。「妥協したことが一度もないなんて言うつもりはない。だけどあまりにもひどいステレオタイプだと思う時には私は編集者とも戦う。私の力は限られているし、すべてを決める権限もない。でもどこで線を引くか、自分で決めるほかないのだから。」<sup>(130)</sup>彼女は共同通信の記者、外国人として初めての首相記者団の一員であった。彼女のようなスタンスを個人レベルの問題に放置しない知恵はないものか。日本の経済が落ち込んで以来、特派員の数も減り質も落ちたといわれる。その影響は書かれるものの質の低下という形を取る可能性がある。これもメディア報道が重要であるという認識さえ生まれれば、経済的になんとか解決できる筈の問題である。

日本人の意識をもっと世界に広く開いていく必要もある。サッカーのワールド・カップには普通日本とはあまり縁のない一般人が多く来日した。また多くのスポーツ記者も加え約一万人の英国人が訪日したと言われる。記者も新鮮な目で日本体験記を本国に送り、大衆紙にも好意的な記事が多かった。「いかに英国は自分勝手な社会だったか身にしみた…人生まで学んだ」(サンデー・テレグラフ, 2002/6/9), また「海外でイギリスのファンを見て誇りに思ったのは初めての経験」(ディリー・ミラー, 2002/6/3)といった記事もあり、非常に良い変化があった、と土生氏は報告している<sup>(131)</sup>。

メディアで流される情報の重要性を認識すれば、誤認や誤解に基づく報道、安易

(128) ニーマン, M.『外国メディアの日本イメージ』 p.171.

(129) Burress, *op. cit.*, p.57.

(130) Ford, *op. cit.*, p.76.

(131) 土生, *op. cit.*, p.16.

な娯楽として流されるあまりにも不快な、日本のイメージを大きく傷つける番組や記事の持つ危険に気づく筈である。これをチェックし必要なら抗議もし、再発しない対策も練る必要がある、と石澤氏は強調する。バレス氏も同意見である。「影響力を持つ報道の中に日本人に対しての偏見が嫌になる位あった。私は偏見に満ちた報道はきちんと問題にした方がいいと思っている。でないと単に日米関係が悪化するだけでなくアメリカのジャーナリズムの信頼と評判をも曇らせることになるからだ」と主張する<sup>(132)</sup>。問題は書かれた国と書いた国が地理的に離れていて言語も異なるためにフィード・バックがきかないという点である。当然それを良いことに書く側も無責任になる。なんらかの形でチェック機能を持つことが望まれる。記者の書く記事はその属する新聞社及び編集者の責任であることを、あらゆる場で明確に確認し主張していきたい。

#### c) 偏見と戦う姿勢

##### \* ウェールズ

歴史的に差別を受けやすく、イングランド発信のメディアの餌食になりやすかつたウェールズ（ウェールズ人は元々ケルト民族でウェールズ語も現在は公用語）は、また日本の企業が多く進出した場所でもある。カーディフ大学には Cardiff Japan Studies Centre があり、またジャーナリズム学部のマイケル・アンデルスマ教授設立の「ウェイルズ・メディア・フォラム」の活動が1992年以来行われている。先に紹介した *Reporting Japan* (2001) と *Reporting the U.K.* (2002) 報告書はこの活動の一端である。Japan 2001 英国内運営委員会の委員でもあったベット・デービス氏はメディアによるウェールズ蔑視を始めとするあらゆる不公平と戦っている。在ウェールズの日本人、また日本に多くの友人を持ち小柄で優雅な容姿からは想像もつかない程エネルギッシュで、日本とウェールズとの交流、日本理解の活動のすべてに情熱を燃やしている。「日本は海外からどのように眺められているか」を探る私のこのプロジェクトにも惜しみなく協力し多くの資料提供や助言を受けた。「自分の子孫の為に良い社会を作ること」という言葉が忘れられない。その為には「行動が必要だ」と言う。Eleri Carrog 氏はウェールズ市民グループ (CEFN) を

<sup>(132)</sup> Burress, *op. cit.*, p.48.

結成し、その代表及びスپークスマンとして、特に英國メディアのウェールズへの差別的発言や行為、例えばのアン・ロビンソンのクイズ・ショウでの発言などを取り上げ、ウェブ上に掲載しコメントしている。市民運動の背景も持つこうしたウェブ上の抗議は有効で、無知からくる愚かで不用意なからかいや見下された態度は改善されてきているという<sup>(133)</sup>。

#### \*ネット上で

地理的には遠い国も実はインターネットなどを通して驚くほどに距離が縮まった感がある。BBCは2003年日本の「ひきこもり問題」をあつかった“Japan: the Missing Millions”という番組を日本で作った。真面目な番組ではあるが「日本にのみ存在する不可思議な病気」といった日本異質論をセールス・ポイントとして紹介した。しかしこの番組を見た英国人達のチャット・ページへの書き込みの多くが「私も同じ体験を持っている」、「日本だけの問題ではない」と書いている<sup>(134)</sup>。こういったページがメディア側の姿勢を正すチェック機能を持っているのである。当然匿名の場合の悪ノリの記載の危険もあるだろうが、それを見分けることは、難しいことではない。BBCの番組を入手した時ちょうどNHKも「ひきこもり」に関する番組シリーズを放映しネット相談室をもうけていた<sup>(135)</sup>。本学部宮崎助教授と共に設けていたテーマ研究会ではBBC、NHKの両番組を学生に見せて、テーマの扱い方の違いなどを比較検討させた。

ハンガリーのTV2番組、“Micuko—the World in Slanted Eyes”ではハンガリー人女性を黒髪、出っ歯にしてグロテスクな日本女性に変装させてハンガリーの有名人を妙な言葉でインタビューするという娯楽番組を制作、シリーズで流そうとしたが、ハンガリーに住む日本人達はこれに反発し大使館からの抗議にテレビ局は一旦3ヶ月中断して改めて作り直すことを決定した。この時もこの番組関連でチャット・ページが作られると、日本に住むハンガリー人達がこのチャットに日本人向けの謝罪文を寄せるなどの動きがあった<sup>(136)</sup>。娯楽番組もだんだん制作者側の独断と

(133) <http://www.cefn.net/>

(134) [http://news.bbc.co.uk/1/hi/programmes/correspondent/read\\_your\\_comments/2335031.stm](http://news.bbc.co.uk/1/hi/programmes/correspondent/read_your_comments/2335031.stm)

(135) <http://www.nhk.or.jp/hikikomori/>

(136) <http://forum.japanreference.com/>

独善が許されない形になってきているのは良いことである。

### 3. 自浄作用は働くか

#### a) NYT, ミラー紙, BBC

2003年5月世界を揺るがしたNYT記事の大量捏造、盗用、ネットからの「つぎはぎ創作」問題が発覚した。事件を起こしたのは入社4年目で当時27歳のジェイソン・グレア記者で、2002年10月からの半年間に書いた73の記事のうち36に捏造、盗用、誤りが確認されたという。引用の言葉も大半はインタビューした形跡もない。同記者は一面向け記事を多数出稿、記事の発信地も巧妙に騙していた。当時の編集トップ、ハウエル・レインズは2001年に就任、9月のテロ、アフガニスタン侵攻、エンロン破綻、イラク侵攻など大事件が続く中陣頭指揮を取り、2002年にはNYTは7部門でピュリツァー賞を受賞するなどの輝かしい成果を上げたが、記者達に競争原理を導入、一部の記者を重用優遇する「スター制度」を推進した。嫌気がさした優秀な記者が相次いで離職したという。問題を起こした記者は「エリート中のエリートで鼻高々の編集長達を騙し続けてやった」と自慢氣で回顧録の出版を準備中という。事件は報道機関としての信頼を失いかねない大事件である。同社の大株主一族4代目である発行人アーサー・サルツバーガーは「創業152年の中でどん底だ」として直ちに特別委員会を設置。「編集者間の壁のせいで問題意識が共有されず、一部記者の重用傾向、編集者間の独裁的編集体制が問題であった」として経営陣の責任を大とした。レイン編集主幹及びジェラルド・ボイド編集局長引責辞職、7月には編集の新トップにビル・ケラー氏をおいた。再発防止に向けオンブズマン制度を導入、読者からの指摘に基づいて社内を調査する権限を持つパブリック・エディターを外部から招いた。同時にモラル向上に向けて記者の雇用や昇進をチェックしたり記事の署名などの指針作り担当の編集者職も設けた(2003/5、日経、朝日、読売他)。USA・トゥデー紙の記者もイラクから捏造記事を送り続けていたことが発覚している。

英国では英大手大衆紙デイリー・ミラーが2004年5月1日特ダネとして報じた英軍兵士がイラク人捕虜の頭に袋を被せ小便をかけている虐待写真が、捏造であった

ことが判明、米軍の虐待が表面化した直後のことでの英軍も同じだったのかと国民に動揺を与えブレア首相も謝罪。国防省が写真の背景などからイラクで撮影されたものでないことを発表、同紙も14日これを認め、ピアース・モルガン編集長が辞任した。「我々はかつがれた。ごめんなさい。(Sorry... We were Hoaxed)」という見出しをつけたが、これも自分達も被害者といった受身に聞こえる。写真が持ち込まれた経緯などは明らかにしていない（2004/5/15、日経）。

イラク戦争開始に大義名分を与えたと言われる「イラク・ドシエ」に書かれた「45分で破壊可能」という表現が正しいかどうかをめぐって英国政府と BBC が対立した。この始まりは BBC ギリガム記者がドシエの内容につきイラクの武器専門家、国防省のデビッド・ケリーにその信憑性についてインタビューし「事実確認の無いまま政府はドシエを発表したのではないか」とケリー氏の名は伏せて政府を批判、マスコミは騒ぐ。キャンベル補佐官は BBC に反発、7月には板ばさみになってケリー氏が自殺する。これに関してハットン委員会が非公開審議を行い（2003/8/10）、問題のすべての責任は BBC にあるとした。BBC 経営会長、会長、ケリー氏発言の一部を不用意に誇張した表現をしたことの責任を取ってギリガム記者も辞職した。しかしこの間イラク大量破壊兵器は発見されず、「45分」表現の出典も信頼のおけるものでないことが判明した。ハットン委員会報告に続く BBC 幹部の辞任にも拘わらず世論の3分の2は BBC は英國の誇りである、と表明しておりブレア政権はこの件での疑いを晴らしてはいない<sup>(137)</sup>。2004年7月14日「イラク・ドシエ」を巡って再びバトラー卿を委員長とする独立調査委員会で審議された。「45分」という表現をめぐっての政府の対応、戦争正当化のブレア首相の姿勢に対して新たに国民からの批判が起こるであろうと見られている。

一方アメリカではイラクの大量破壊兵器の開発疑惑について「絶対に保有している」とブッシュ大統領に進言した批判を受けテネット CIA 長官は7月辞任するが事実上更迭であると言われる（2004/6/4、日経）。

新聞にとっては試練の数年であった。ここから学んで新聞は再び信頼を勝ち取るだろうか。自浄作用の効果を期待する。

---

(137) BBC 「パノラマ」 2004/1/21.

### b) 苦情受けつけ機関（英国）

英国にはメディアに関する苦情を受けつける機関として Press Complaints Commission (PCC) がある。新聞、雑誌が Code of Practice の条文、精神を遵守することを見届け一般からの苦情受け付け、処理をする機関である。ウェップ・サイト ([www.pcc.org.uk](http://www.pcc.org.uk))、e-mail、封書、電話、ファックスで苦情を送ることが出来る。その申し立てが正当なものと判断されると、PCC は調査し、その結果を報告書で公表するという仕組みである。テレビ番組とラジオに関しては Independent Television commission (ITC)、また Broadcasting Standards Commission in the U.K. そして BBC に関しては BBC Complaints Unit がある。しかしそれならばこの論文で扱っているギルの記事の内容に関して PCC に「申し立て」を行った場合受け入れられるかについてはかなり悲観的にならざるを得ない。PCC に訴え出る条件は、直接に被害にあった（誤報により影響を受けた）個人または団体が対象であり、好み、品位や対面からの批判、無礼だとする「申し立て」は受けつけない、とある<sup>(138)</sup>。苦情への PCC 側の対処報告書を読んでも「誤報」であるかどうかの一線は「文字通りの事実」に引いており、「書いた記者の個人的印象」なら多くの抜け道がある。「冗談やユーモアの名の許にいかに多くのいじめや嫌がらせ、嘲りが横行してきたことか」というベル教授の観察に共感する<sup>(139)</sup>。「冗談ですよ」と言って非難をかわし、「冗談もわからない人間」としてむしろ相手を蔑む習慣と、基本的にはこの形で商売をする娯楽用メディアには公けの打つ手はないのが実情である。PCC のような機関があることの意義は大いに認めるが更にメディア側からの自粛、自浄が強く望まれる。

メディアのあり方についての批判は「表現の自由」を妨げるものとして却下されることが多い。自由という大義に値しないような個々の「表現」が「自由」の名を借りて暴走するときも「自由」を守るために見過ごす。米連邦最高裁は「ポルノサイト規制法、青少年オンライン保護法は表現の自由の点から違憲」との判決を下し

---

(138) PCC: Info sheets, p.2.

(139) Bell, *op. cit.*

た<sup>(140)</sup>。「表現の自由」についてもっと多くの議論がなされるべきだと思う。国が問題の記事が載ったものの販売を差し止めるのにはあくまで慎重であるべきなのは当然であるが、本年田中真紀子前外相の長女に関する記事が問題となった『週刊文春』(2004/3/25号)は後には差し止め対象となっていた74万部が完売、出版禁止問題を検証した4月1日号も好調な売れ行きであった。すれすれのものを出すと売れるのである。この問題に関して日本経済新聞の社説はこう締めくくっている。「今回の出版差し止め問題で問われたのは週刊誌報道の在り方である…個人の名誉やプライバシーを犠牲にして部数拡大を図ってきたとの批判もある。表現の自由には重い責任が伴うことを報道に携わる者は肝に銘ずる必要があろう」(2004/4/1 日経)。ここからも見えてくるのはメディアのあからさまな商業主義である。読者、視聴者への迎合は偏見への迎合であり安易な妥協である。

流動化、複雑化する国際関係の時代にあってはマス・メディアによるイメージの形成については、より適切にチェックする必要がある、とする石澤氏の主張は正しい。石澤氏編集の『日本はどう報じられているか』、ジパングによる『笑われる日本人』、産経新聞論説委員千野境子氏の『世界は日本、アジアをどう伝えているか』などの素晴らしい本が出版されている。いずれも日本が世界からどう見られているかについての認識と、それでは国際社会に向けてどのようなアクションを起こしたら良いかを考えるきっかけとなるだろう。日本は「自分達がいかに積極的に情報を発信しているか」について、もっと考えるべきだ、と石澤氏は主張する<sup>(141)</sup>。

## VII. 結び：「発信し、自己主張する日本」へ

### 1. 変わりつつある日本

世界のメディアが作る日本のイメージを認識し、間違った報道に対して抗議をする、という「受身から出発するアクション」だけでは不充分である。日本側から積極的に望ましい情報を発信していく、ということがより重要である。千野氏は言う。

勿論相手の誤りを正すのは大事だ。しかしそうした対症療法でなく、日頃

---

(140) 「ダイジェスト」、日本経済新聞、2004/7/1.

(141) 石澤、*op. cit.*, p.10.

から日本の立場を積極的に発信する方がどれ程建設的かしれない…例えば戦争責任の問題で謝罪、補償も済ませたドイツとその両方を拒み続ける日本、という図式が世界の通説のようになっているが、このような報道に対して単に抗議するだけでは明らかに不充分。ドイツは個人補償であり日本は国家補償なのだ、という違いを明確に説明しないと外国には分からない<sup>(142)</sup>。

1995年設立された「日本人の考え方をネットで世界へ」という海外広報協会（英正道会長）のサイトは米国の教育機関を中心に既に年間2億超のヒット数がある。今回刷新され、英語で意見を発信する国内の団体、企業などを網羅したインターネットのサイトも2003年運営を始めた。ネット上に点在する英語での意見発信サイトを整理、紹介し海外に伝える機会を増やす（2003/4/12、日経）。またインターネットによるコラム「日本からの意見（Japan in their Own Words）」を通して「歴史教科書問題」、「首相の靖国参拝」などに関する日本内での議論が発信された<sup>(143)</sup>。「日本は世界で非常に誤解されているが、それは政府の公式な意見しか出ていないからだと思う…実際には日本にもいろいろな意見がある。日本人はそれを積極的に出す努力をしないといけない。一枚岩でない日本、多様な意見の存在が日本への信頼にもつながる」と英正道会長は語る。

また国際大連はグローコム情報発信機構を始めた<sup>(144)</sup>。同機構は「海外における報道で、日本に関する誤解や誤報をチェックし、タイミング良く正すこと」を重要な役割の一つにして行くという<sup>(145)</sup>。

## 2. Cool Japan

外国の記者達は「今日本は面白くないのだ」と言う。この時日本の側にも面白い情報を海外に発信していく努力をしていない、という問題がある。勿論その前に日本が面白い国でなければならないのだが、実際には事実面白いところを沢山持った国なのである。過去からのステレオタイプ「不可解な日本」から脱皮した「世界が

(142) 千野、*op. cit.*, pp.58–59.

(143) <http://www.esuj.gr.jp/jitow/eng/>

(144) <http://www.glocom.org/>

(145) 千野、*op. cit.*, p.299.

共有できる、しかも強烈に魅力的な日本」を見てみよう。

それを一言で言うならば「クールな日本」「かっこ良い日本」である。Foreign Policy 誌に載ったダグラス・マグレイ氏の論文 “Japan Gross National Cool”<sup>(146)</sup> が GNP をもじった GNC、で日本の「文化力」に注目。「日本は再び超大国となりつつある…グローバルな文化的影響力は静かに増しつつある。ポップ音楽から消費者用電子機器、建築からファッショニ、アニメから料理まで日本は80年代に経済的超大国だったときよりも、もっと文化的超大国のようだ」と主張。ポケモンは65カ国、30以上の言語に翻訳され、既に2兆円規模の世界市場になっている。「ポケモンは日本の最も成功した文化輸出の一つで、優しさやユーモアを表す。最良の日本を反映している」と NYT は書いている（1999/11/8）。ハロー・キティー商品は1万2000点から1万5000点にのぼり、香港、ソウル、バンコクの何百万人もの10代が最新の東京ファッショニを欲しがる<sup>(147)</sup>。「クール・ジャパン」はいまやキー・ワードとなった。2003年12月12日には GNC の提唱者マグレイ氏を迎えて公開シンポジアム “Cool Japan：新しい日本の文化力” が開催された。

悲観的な見通しの日本の政治、経済に比べて日本の文化には力があり常に新しいトレンドが海外へ発信される…日本文化のかっこよさがパワーを持ち世界に強い影響を与えていた。強力な発進力を作っている…私はポップだけでなくハイ・カルチャーまですべての文化を含めてクール・ジャパンを考えている…文化は草の根の人々が国際的に交流を深める一つの手立てとなる。

とマグレイ氏は説明している。日本食もかっこいいステイタス的なものとなっている、などパネリストからの発言があった<sup>(148)</sup>。日本のアニメーションも国際的に活躍している。ポケモン映画「ミュウツーの逆襲」（1999/11）、アーリントンでの第6回日本アニメ・フェスティバル（2000/2）、タイム誌の宮崎アニメ特集（2001/10/21）、『千と千尋の神隠し』ベルリン映画祭で金熊賞受賞（2001/2）、ニューヨーク映画批評家協会で最優勝アニメ賞受賞（2001/12/17）、「最早アニメはサブ・カルチャー

(146) “Japan Gross National Cool”, Foreign Policy, 5. 6号所収, 2002/12.

(147) 千野, op. cit., p.299.

(148) 日本経済新聞, 2003/12/12.

ではなく世界的現象である」とまで言われた（The Chicago Tribune, 2002/12/3）。これらのすべてを全米の各紙が報道しアニメは大きなニュース・メーカーとなった。アニメ関連市場は既に5,000億円を超えるといわれる（N.H.K. 2004/7/26）。

世界から見た新しい日本像はオブザーバー紙の色付き雑誌『ライフ』の全70頁に特集された。2001年4月のことである。

日本のバブルがはじけ、株価はまた下げている…こんな時どうして『ライフ』のすべての頁を日本で飾るのか？それはもう一つの日本があるからなのだ。それはアメリカやヨーロッパが「プレイ・ステーションをなんとか分けて下さい」と日本に哀願し、子供達は皆クリスマスにはロボットの犬が欲しいとねだるからだ。マンガ、武道、ポケモン、ハロー・キティー、活気に満ちた町のファッショニ、服つくりを一つの芸術にまで高めたデザイナー物の日本。私達に寿司、天ぷら、鉄板焼をくれた日本だ… 誰もスシ・バーや日本のアニメが英国を侵略した、などとは言わない。こういった分野での日本の世界を舞台にした活躍は紛争を巻き起こすことはない。興奮させられるように異質だけれど、身近でもあり、刺激的だけれど警戒すべきだなどとは思わせない未来へと向かっている。どうしてかと言えば既に私達が知っていて使っているテクノロジーに根ざしたものだからだ… 日本を最近訪れた人は皆その色彩とエネルギーと創造性に夢中だ… 今日本にあるものはもうすぐここに来る。だから未来に乾杯<sup>(149)</sup>。

といった具合である。1995年サンデー・テレグラフは「やっぱり日本人はサディスティックで… 沢山の生魚を食べる人種だ」（The Sunday Telegraph, 1995/3）と書いたが、英国人がスシ・バーに行列している今もはやこうは書けなくなる。Reporting Japan : 1990 – 2000（英国の日本報道レポート）はその中で1章4頁を割き「賢いマシンを作る日本のテクノロジー」と題して、英國の新聞が日本のコンテンツ産業を大々的に報じていることを報告<sup>(150)</sup>。

時は熟したのだ。英國も世代が変わったのだ。ギルの記事を批評してチャイルド氏は言う。「今の英國の若い世代は一昔前のような性に対する不自然な心理的抑圧

(149) The Observer, 2001/4/1, (引用部分近藤訳)

(150) Reporting Japan, pp.30 – 32.

がない。だから東洋が性に奔放である、などという記事に特に驚いたり興奮することはない。ギルの記事は過去の遺物に縋りつく人々を対象としたもので、私達には不快さだけが残る。」<sup>(151)</sup> *Reporting Japan* は先に引用したように「日本に関しては英國の興味は2点に絞られて、一つは日本の不可思議な面と、もう一つは私達自身の生活の上にインパクトを持つ日本である」と分析しているが、そのうちの不可思議な日本は徐々に姿を消していくか趣味の悪い懐古調のものとして興味を持つ層が限られていくのではないか。読者の好みに合わせることがコマーシャリズムなのだから新聞も変わっていくと予想される。

この新しいクール・ジャパンは単に日本と欧米との架け橋となるだけではない。2004年2月開催のシンポジアム「日本と中東イスラム世界—共生の時代」でもパネル・ディスカッションでは文化交流の活性化を求める声が相次いだ。「マンガやアニメは中東でも大きな関心を集めれる日本の資産だ」という発言もあり、メディアの交流促進が提唱された。「テレビドラマ『おしん』は非西歐的だから中東の人々にも感情移入できた」(山岸助教授) という指摘もあった。最後に「長年の良いイメージを守るために、日本はもっと中東向けに報道キャンペーンを展開する必要がある」とシリアからの出席者は訴えた<sup>(152)</sup>。

日本でも「クールな日本」に関連する記事は単なる国内のニュースとしてではなく、外に目を向けた世界を巻き込む形で報道され始めている。日本経済新聞は「ニッポンの行列」コラムの中で「きらりジャポニズム」を8回シリーズで連載した(2003/12)。日本酒、米国で絶賛されたという貴釀酒、東京麻布十番のロール・スシ・レストラン、国際色豊かな簡易旅館、日本発祥の格闘技のリング、観光スポットとなった町工場、100円ショップ、座禅体験が海外の目を旅行者を惹きつけている。「三鷹の森ジブリ美術館」、「海洋堂大博覧会」、夏からの「驚異の大恐竜博」も人気の的。ピーター・ジャクソン監督(*Lord of the Ring*)は海洋堂の恐竜フィギュア全品を持つコレクターでもある<sup>(153)</sup>。

日本の持つ「何か」に特別の興味を持って訪れる人々は眞に日本の友人となる

---

(151) Child. *op. cit.*

(152) 日本経済新聞、2004/2/21。

(153) *Ibid.*, 「4940 File」, 12号, 2004/7.

人達である。日本を人気ある観光国としよう。年間1600万人の日本人が海外旅行に行くが、訪日外国人旅行者は470万人にとどまる<sup>(154)</sup>。観光国とするためにはお客様となる外国人をより理解しようと努力し、その目線に合わせた意識や改善が生まれるだろう。国際的意識も育つだろう。観光で行って気に入った国に人は愛着を持つものである。

政府の知的財産戦略本部は「コンテンツは海外における国家のイメージ向上にも大きな役割を果たしており、国家戦略を考える上で重要な分野である」と位置づけた<sup>(155)</sup>。今秋には東京大学はプロデューサー養成のプログラムを開講、東京芸術大学、東京大学、慶應義塾大学は映画やアニメーションの作り手を養成する。早稲田大学は情報サービス会社「ぴあ」と映画・映像向けの人材育成で包括的な提携関係を結んだ。文化庁の2004年度「日本映画・映像」振興プランの予算規模は前年度の1.3倍の25億円。人材育成には「映画関係団体等の人材育成事業の支援」の項目で、新規に8千万円が計上された<sup>(156)</sup>。日本も本腰を入れ始めたのだ。

最優先のハード・ニュースはともかくとして、外国記者によって本国に送られる日本のニュースは第一に本国の読者が読みたいニュース、娯楽となるニュースであり、そういったニュースが日本になければ、読者の持つステレオタイプに阿るような形に事実を捻じ曲げて誇張して記事を創作しがちである。これだけ日本も「面白い」ということがわかった今、動かない記者は怠慢である。記者達を動かそう。

ベーカー駐日大使は小泉内閣のホーム・ページへの寄稿で「最高のチーム」と題して両国文化の共通性を強調している。「日米両国民は同じ物を食べ、同じ音楽を聴き、同じファッションをまとうようになった」と書き送っている<sup>(157)</sup>。しかし国と国とが同じになることが最高のチームとなることだ、という考え方には問題はないか？この主張にある種の危険さを感じないか？グローバル化と一般に呼ばれているものが単にアメリカ化であり物質文化に過ぎないと指摘する人は多い。クールな日本は「既に私達が知っていて使っているテクノロジーに根ざしていて身近だから

(154) 「2001年度世界観光機関調べ」

(155) 社説、日本経済新聞、2004/6/27.

(156) *Ibid.*, 2004/7/10.

(157) *Ibid.*, 「春秋」2004/3/30.

脅威には感じない」と書く英國の記事にも少し拘りを感じる。各々の国には特色ある文化があり、それを尊重しながら互いに享受することで世界はもっと豊かになるのではなかろうか。しかし本当の日本を理解してもらう為の最初のステップとしてこの段階は必要なだろう。まず「不可解な異国日本、究極の他者」のイメージからの脱皮が第一歩なのであろう。

もしかすると欧米はまだ「クールな日本」の何に自分達が魅惑されているのかに気付いていないのかも知れない。その本質とはその中に日本の伝統的精神を包括しているという点だと見る批評家もいる。宮崎アニメの特徴について松永大介国際報道官は千野氏のインタビューの中で「ディズニー・アニメが善玉と悪玉がはっきり分かれているのに対し宮崎さんのキャラクターは二元論に収まらない…こういう人間観はともすれば硬直的になりがちな欧米の世界観を徐々に修正させる効果も中長期的に期待できるのではないか」と穿った発言をしている<sup>(158)</sup>。世界に発信する大きな価値があるということだ。決して西洋の物真似ではないということだ。ロンドン・バービカン・シネマで上映されたスタジオ・ジブリ作品に関してファイナンシャル・タイムズは「宮崎駿の『もののけ姫』を観ると、今までの人生がなかったように思え、そして見終わった後、この2時間は一生分以上に感じるだろう（2001/10/18）」と絶賛して写真入りで大きく取り扱った。またユネスコによって「世界無形遺産」と宣言された人形淨瑠璃文楽について河合隼雄文化庁長官は外国、特に欧米の観客が文楽に惹かれるのは、文楽には「もの」と「こころ」とを区別しない日本人の古来からの考えが作用しているからではないか、肉体を持った人間は生身の肉体に邪魔されてわかりにくいが、人形だからこそかえって魂の表現が可能になりやすいという面があると述べている<sup>(159)</sup>。小倉和夫国際交流基金理事長も講演の中で、今日世界で新しい動きが生まれている、それはパリの「ロボット展」に見られたように日本の伝統的考え方—物質が魂を持っているといった概念—と現代のロボットなどのテクノロジーとの関連性への興味である。カラクリ人形は300年前江戸時代に作られている。道具は人間を非人間化する、といった西洋の考え方とは逆であ

(158) 千野, *op. cit.*, p.210.

(159) 日本経済新聞、「特集」, 2004/5/4.

ると述べて「新しい文化外交」の一つの方向を示した<sup>(160)</sup>。「‘Japanese-ness’ が核となって生きている文化（小倉氏）」の重要性が語られたと思う。国際交流基金はJAPAN2001の助成団体の一つでもあった。

この論文は能、歌舞伎、文楽など日本最高峰の伝統芸能から、スタジオ・ジブリ、アニメのワークショップ、祭り、日本の「Facts of Life」、「Tokyo Life」展までを網羅して英国に日本の文化体験をさせた JAPAN2001の紹介から始まり、JGNC (Japan Gross National Cool) を誇る明るい日本の未来の姿を見せて終わった。論文の主役、「歪んだ鏡」は輝く二つの嶺の間に横たわる暗い谷底に沈んだ感がある。そこが鏡の住みかだ。そこから嶺や山々やそこに住む動物達を写し続ける。誰かが心して拾い上げないかぎり歪んだ鏡の活動は続く。

---

(160) 小倉和夫氏講演、「新しい文化外交を目指して：課題と展望」2004/6/16、国際文化会館にて。